

鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報

17

平成13年度

鹿児島大学埋蔵文化財調査室

2003年3月

序

鹿児島大学キャンパスには、後期旧石器時代から近代までの多くの貴重な遺跡が包蔵されています。キャンパスの施設整備事業に伴う発掘調査を行うため、昭和60年に埋蔵文化財調査室が発足しました。これまでの調査結果ならびに研究成果は、埋蔵文化財調査室年報（Vol.1～16）として逐次報告されてきました。

ここに平成13年度の調査結果の報告として、鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Vol.17を刊行いたします。平成13年度には郡元キャンパスにおいて発掘調査2件、試掘調査1件、立会い調査6件、桜ヶ丘キャンパスでは発掘調査1件、立会調査3件が行われました。本年報には、それらの中から整理作業が終了した郡元キャンパスの発掘調査1件と郡元キャンパスの試掘調査1件・立会い調査1件の成果を報告いたします。

平成13年度の調査概要を1章にまとめました。2章には郡元キャンパスのサークル棟建設地での発掘調査を掲載しました。この調査により、弥生時代中期後半（約2000年前）の遺構や土器などの遺物がその時期の単純層から出土し、それまで空白期間であった当時の様子が具体的に確認できました。これによって、郡元キャンパスでは弥生時代中期の始めから古代までの約1100年間、連續して人間が生活していたことがわかつてきました。

郡元キャンパス総合研究棟（理工系）の試掘調査の結果を3章に報告しています。この調査によって、弥生時代の水田の可能性がある層が確認され、本調査に向けて良好なデータを得ることができました。4章では立会調査の結果を掲載していますが、これまで未調査だった桜ヶ丘キャンパスの運動場で弥生時代の遺物包含層が良好な状態で残り、遺構が存在していることが判明しました。

その他として、埋蔵文化財調査室の要項と受贈図書のリストを掲載しました。また付録として、郡元キャンパスの遺跡群における自然科学分析結果を報告しています。この分析結果からは、放射性炭素年代測定により古墳時代の住居跡の実年代が、プラント・オパール分析の結果からは3章に掲載している弥生時代中期以前の層が水田であることがわかつてきました。

最後にあたり、埋蔵文化財調査室スタッフには、精力的な調査ならびに研究により本事業が支えられていること、ならびにこのように立派な年報が出版されましたことに関して、感謝の意を表したいと存じます。

平成15年2月

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会
委員長 辻尾昇三

例　言

- 1 本年報は鹿児島大学構内において、鹿児島大学埋蔵文化財調査室が平成13年度に行った調査活動の成果をまとめたものである。なお、付録として平成13年度に古環境研究所に依頼した自然科学分析結果報告を掲載している。
- 2 本書に掲載している発掘調査及び立会調査は、鹿児島大学埋蔵文化財調査室が担当した。個々の調査担当者は各章の調査報告に記述した。調査における図面・写真的担当は以下のとおりである。
2：中村直子・寒川朋枝・王力明・鎌田浩平，
3：寒川朋枝，4：新里貴之・中村・寒川
- 3 本書の作成にあたっては、埋蔵文化財調査室が行った。遺物の実測の担当は以下の通りである。
2：寒川・王・中村，3：寒川，4：新里
製図は中村・新里・寒川が担当した。写真撮影は中村・新里が行った。
執筆は1：中村，2：中村，3：寒川・中村，
4：新里が行った。総集は中村が行った。
- 4 付録掲載の出土遺物に関しては、橋本達也氏・本田道輝氏・渡辺芳郎氏（鹿児島大学）のご教授を賜った。また、石器の石材に関しては、大坂裕之氏（鹿児島大学）のご教授を賜った。
- 5 発掘調査による遺物の保管は、埋蔵文化財調査室の管理の下、各学部、部局が収蔵している。また、図面・写真などの資料は埋蔵文化財調査室に保管している。

凡　例

- 1 昭和60年6月1日の埋蔵文化財調査室の設置を機として、鹿児島大学構内におけるこれから埋蔵文化財調査に便であるように鹿児島大学構内座標を郡元団地と桜ヶ丘団地（旧宇宙団地）とに設定した。その設置基準は以下のようである。
 - (1) 郡元団地では、国土座標第2座標系 ($X = -158.200$, $Y = -42.400$) を基点として一辺50mの方形地区割りを行った (Fig.3参照)。
 - (2) 桜ヶ丘団地では、国土座標第2座標系 ($X = -161.600$, $Y = -44.400$) を基点として一辺50mの方形地区割りを行った。
- 2 本年報において報告を行った調査地点については、Fig.3にその位置を記している。
- 3 本年報におけるレベル高はすべて海拔を表し、方位は真北方向を示す。
- 4 本書で使用した造構の表示記号は以下の通りである。
SK：土壤状造構 SD：溝状造構 P：ピット
- 5 2・付録で使用した土層の色調は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修）を使用した。
- 6 遺物については観察表を作成した。その表記、表現については以下の通りである。
色調：『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修）を使用し、この色調に当てはまらないものについては、「～に類似」と表記した。
胎土：砂粒の種類については、特定できないものはその色調で表記した。粒子の大きさは疊（～3mm）、粗砂粒、砂粒、細砂粒に分けた。
胎土中の砂粒の多さについては、便宜的に1～5の5段階に分けた。5：15%以上、4：10%前後、3：5%前後、2：1%前後、1：1%以下とした。
法量：復原による法量は、() をつけた。
- 7 本文中の遺物番号は、挿図、図版、遺物観察表と一致させた。

本文目次

1 平成13年度の調査概要	1
1.1 鹿児島大学構内遺跡の立地と環境	1
1.2 調査概要	1
2 郡元団地M・N-4・5区（サークル棟建設予定地）における発掘調査報告	6
2.1 調査にいたる経過	6
2.2 調査の体制	6
2.3 調査の経過	6
2.4 層位	6
2.5 遺構	9
2.6 遺物	10
2.7 まとめ	17
3 郡元団地K-9区（総合研究棟Ⅱ建設予定地）における試掘調査報告	19
3.1 調査にいたる経過	19
3.2 調査の体制	19
3.3 調査の経過	19
3.4 層位	19
3.5 遺構と遺物	20
3.6 試掘調査の結果	22
4 立会調査	23
鹿児島大学埋蔵文化財調査室要項	34
受贈図書一覧	36
付録 鹿児島大学構内遺跡群郡元団地における自然化学分析	41
I. 放射性炭素年代測定	42
II. 植物珪酸体（プラント・オパール）分析	43

1 平成 13 年度(2001 年 4 月～2002 年 3 月)の調査概要

1.1 鹿児島大学構内遺跡の立地と環境

鹿児島大学構内遺跡が所在する鹿児島市は、薩摩半島の北東部に位置する。東側には鹿児島湾(錦江湾)が広がり、他の三方は姶良カルデラに由来するシラス台地に囲まれている。本書に掲載する調査地点は、鹿児島大学構内の郡元団地と桜ヶ丘団地で、それぞれを、鹿児島大学構内遺跡郡元団地、同桜ヶ丘団地と呼んでいる。郡元団地は沖積平野の南端部付近に位置し、標高約 7m を測る。從来から周知の道路として知られており、校舎などの建設に伴う事前の発掘調査も多く行われている。昭和 59 年までは字名などが遺跡の名称として用いられており、県立医大遺跡、付属中学校敷地内遺跡、釣田遺跡、木水田跡も郡元団地内の遺跡である¹⁾。付近には弥生時代の住居が検出された一ノ宮遺跡²⁾がある。郡元団地では古墳時代の住居跡群が多く発見され、現在三つの住居群が把握できている。一つは郡元キャンパスのほぼ中央部、もう一つは南西部で、いずれも微高地に形成されている。中央に位置する住居群のすぐ北側には河川が確認されている。河川の中からは弥生時代から古墳時代にかけての木製品や木杭が出土している。平成 9 年度の工学部における調査では、弥生時代の水田跡が検出されている。古墳時代の水田跡は現在のところ、構内ではまだ発見されていないが、古墳時代の包含層には多量のイネ・プラント・オバールが含まれており³⁾、稲作が継続的に行われていたことがわかつる。桜ヶ丘団地は郡元団地から南に約 2.5km の危ヶ原台地上に位置し、標高約 70m を測る。昭和 60 年に埋蔵文化財調査室が設置されてからは、「鹿児島大学構内遺

跡宇宙団地」と呼称したが、キャンパス名の変更に伴い、桜ヶ丘団地と呼んでいる。付近の台地上には、旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺跡が点在しており、桜ヶ丘団地でも同様の時期の遺物が出土している。また、縄文時代早期、弥生時代前期の住居跡も確認されている。

1.2 調査概要(Tab. I)

平成 13 年度は、前年度から継続した調査も含めて、発掘調査 3 件、試掘調査 1 件、立会調査 9 件を行った。このうち、2001-1 と 2001-3、立会調査の調査報告については本年報に掲載している。

郡元団地では、2001-2・B において古墳時代後半期の住居跡群を検出し、そこから多くの遺物が出土した。また、2001-1・2 において、これまで遺構がはっきりしなかった弥生時代中期の遺構が確認でき、また、古墳時代後半期遺物包含層との明確な層位的な新旧関係を把握することができた。弥生時代中期の遺物は、郡元団地内にてよく出土していたのだが、古墳時代後半期の遺物包含層に混在していることが多く、それは古墳時代後半期の住居跡によって弥生時代中期の包含層が搅乱されたためと推定してきたが、この 2 つの調査によって、弥生時代中期単独の遺物包含層を確認できたことは、大きな成果であった。

また、2001-3 の試掘調査によって、弥生時代中期もしくはそれ以前の水田跡と考えられる層を確認できた。2001-3 と 2001-2 の場所は近接しており、弥生時代中期前における居住エリアと生産エリアの関係を把握する良好な遺構となつた。

桜ヶ丘団地では、平成 12 年度から継続して 2000-2 の調査を行ったが、約 11000 年前に噴出した薩摩火山灰層の下層から陥穴を 4 基確認した。後期旧石器～縄文時代草創期の時期にあたるものと考えられる。この成果を一般市民に公開するため、6 月 23 日に遺跡説明会を行い、約 50 名の参加者が集まつた。

また、古墳時代や弥生時代の遺物および弥生時代の遺構が 2001-C において確認できた。弥生時代の遺構および遺物は桜ヶ丘団地の北東部において検出されていたが、北西部にあたる 2001-C では当時の包含層や遺構がより良好に残存していることが確認できた。



Fig. 1 鹿児島市の位置

Tab.1 平成13年度調査一覧

調査コード	種類	地区	事業名	期間	備考
2000-2	発掘調査	桜ヶ丘団地H-1-8・9	保健学学科会館建設	2001年2月5日～7月20日	後期旧石器～绳文時代草創期始 し穴道構4基、遺跡説明会実施
2001-1	発掘調査	郡元団地M-N-4・5区	サークル棟建設	2001年9月20日～11月5日	弥生時代中期構造物、ピット群、古墳時代遺物、本古2章に報告掲載
2001-2	発掘調査	郡元団地J-7・8区	理学部改修地	2002年3月11日～(9月13日)	古墳時代住居跡群、溝跡、弥生時代住居跡
2001-3	試掘調査	郡元団地K-9区	総合研究棟II建設予定地	2002年3月13～19日	弥生時代～近世の遺物包含層、本古3章に報告掲載
2001-A	立会調査	郡元団地I-J-12・13区	情報ネットワーク設備工事	2001年6月11日	
2001-B	立会調査	郡元団地J-K-3・4区	総合研究棟新設その他電気設備工事	2001年8月6日～24日、9月3日	古墳時代の住居跡検出、古墳時代の土器
2001-C	立会調査	桜ヶ丘団地H-8区	医学部RI施設配管工事	2001年8月20日	弥生時代の住居跡検出、弥生土器
2001-D	立会調査	桜ヶ丘団地I-9・K-8区	医学部保健学科新設その他工事	2001年8月22・23日	
2001-E	立会調査	郡元団地H-6区	農学部保存樹林内掘削(学祭時2001年11月9日のゴミ穴)		
2001-F	立会調査	郡元団地H-4・5区	課外活動施設新設機械設備工事	2001年11月28日・12月22・23日・2002年1月10日・2月22日	
2001-G	立会調査	郡元団地M-N-0・6-7・8区	教育学部幹線並木整備工事	2002年1月10日・2月5日～17日	
2001-H	立会調査	郡元団地D-E-4, K-10, P-5, J-K-9区	理学部支柱樹木移植等工事	2002年3月22・23・25・26・29日	
2001-I	立会調査	桜ヶ丘団地I-8区	医学部校舎新設その他機械設備工事	2002年3月25日	

註

- 1) 松永幸男 1986「第Ⅱ章 鹿児島大学構内遺跡の位置と環境」
「鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報」Ⅰ 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 2) 河口貞徳 1951「一の宮遺跡報告」「考古学雑誌」第37巻第4号
日本考古学会
- 3) 郡元団地L-6区(中央図書館:未報告)によるプラント・オーバール定量分析の結果などによる



Fig.2 鹿児島大学構内遺跡の位置 (S=1/50000)

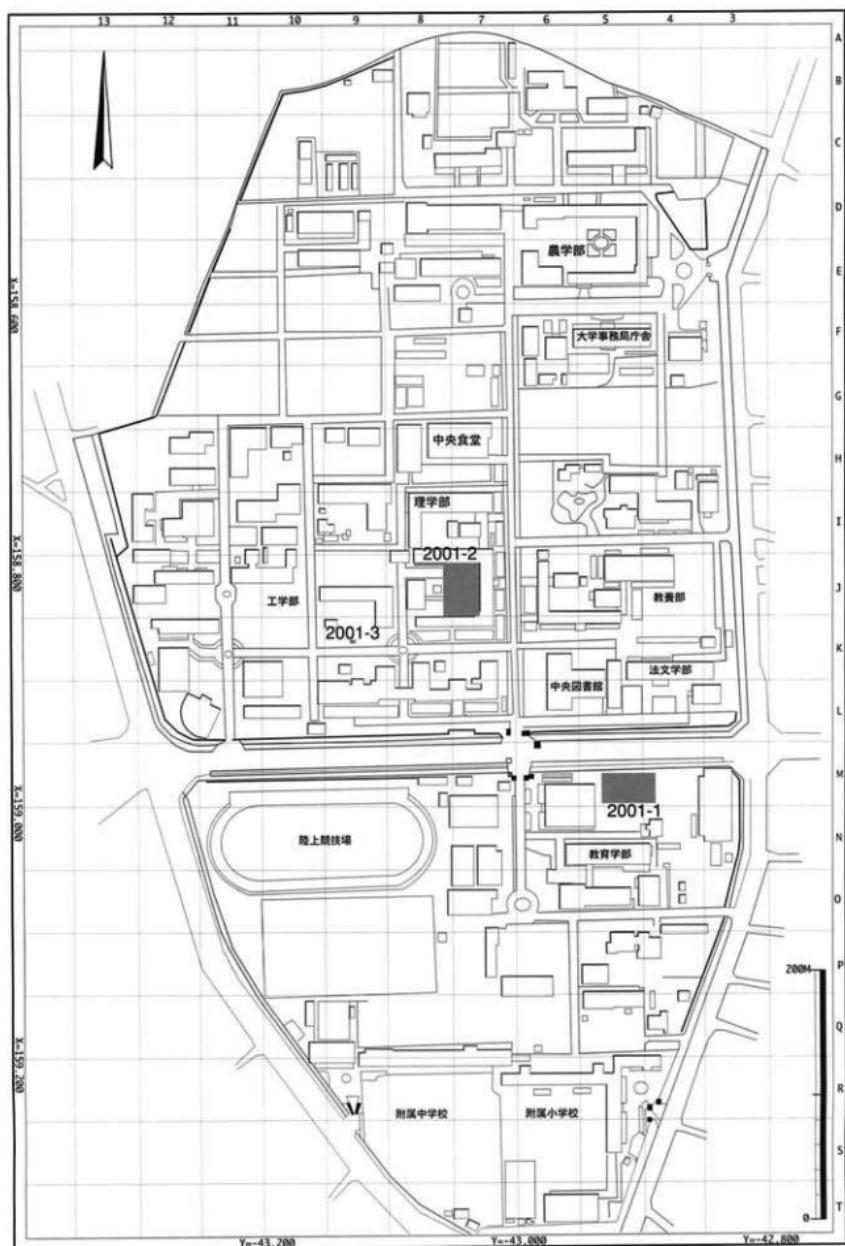


Fig. 3 都元団地構内図(S=1/4000)

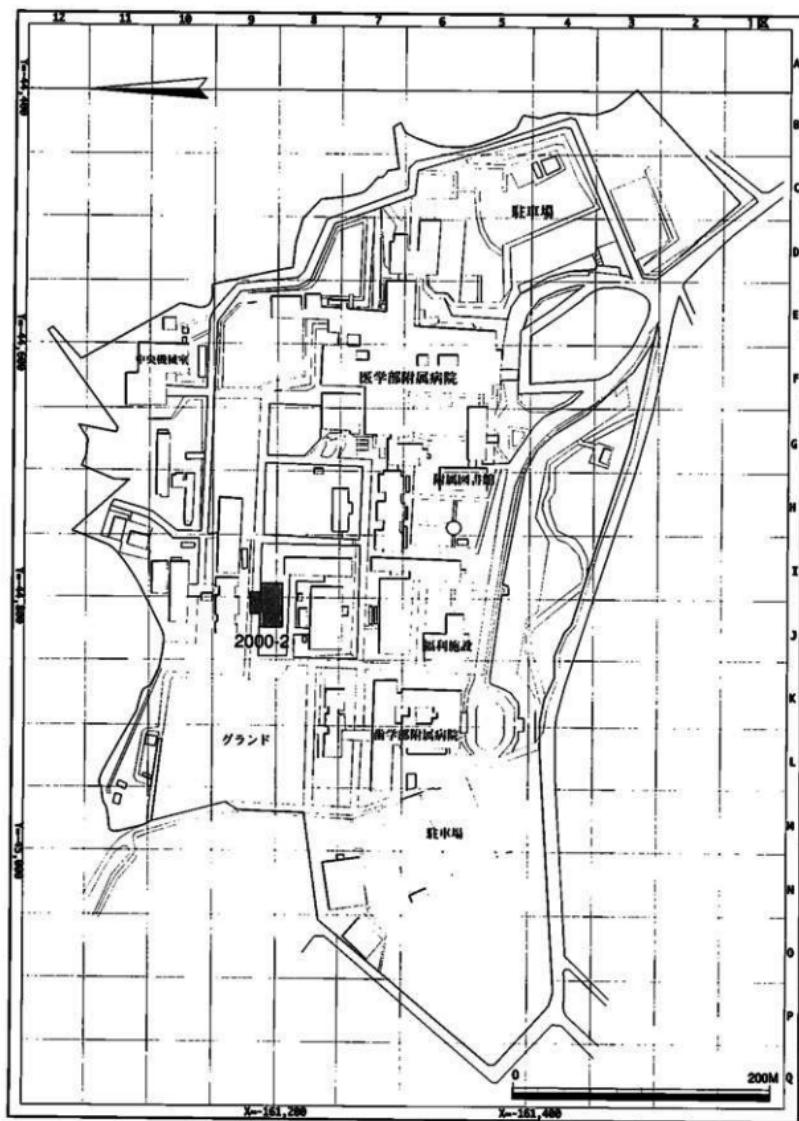


Fig.4 桜ヶ丘団地構内図(S=1/4000)

2 郡元団地M・N-4・5区(サークル棟建設地)における発掘調査報告

2.1 調査にいたる経過

鹿児島大学では、郡元団地内にサークル棟の建設が計画され、教育学部プール西側がその予定地とされた。本調査区東側では、平成5年度にプール建設に伴う試掘調査を行ったが、その結果、プール建設地では地表下1.5mまでは客土などの表土であることがわかつた。しかし1.5m以下には遺物包含層が残存している可能性があつたため、本地点においても埋蔵文化財が埋蔵されていることが推定された。

工事における掘削深度が90cmの予定であったため、それ以上のレベルに遺物包含層が存在しているかどうかを確認するため、平成13年8月1日に重機による試掘調査を行った。建設予定地に4か所のトレンチ(黒い四角部分)を設定し(Fig.5)、層を確認したところ、建設地の西側半分で埋蔵文化財に影響があることがわかつたため、その部分について事前の発掘調査を行うことになった(Fig.5)。

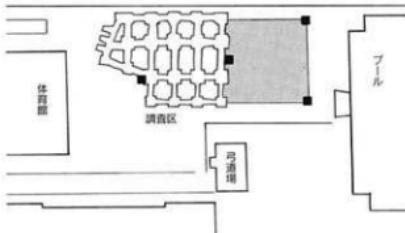


Fig.5 調査区と試掘トレンチ位置図
あみかけ部は建設予定地のうち、調査不要と判断した。

2.2 調査の体制

発掘調査は以下の体制で行った。

調査主体者 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

室長 新田栄治

調査担当 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

室員 中村直子・寒川朋枝・王力明

調査作業員 安倍松伊都子・石谷喜恵子・石谷美智子・岩戸トシ子・巽谷ミエ子・上床久美子・坂口ミエ子・寺光ミツ子・新海ミチ子・末吉サチ子・末吉佐知子・瀬戸口諭・前田裕子・谷口スズ子・谷口ノリ・谷口ミヤ子・鈴崎幸藏・中原清一・中原マス子・中原チエ・名越ヒデ子・新原和子・野下月雄・増満ミエ子・松下郁美・松下トミエ・盛満アイ子・矢住純子・柳田ノリ子・吉永幸子・脇カツ子・脇タミ子・脇ツルエ・脇俊子・脇藤雄・鎌田浩平

2.3 調査の経過

調査は平成13年9月25日～11月4日の期間に実施した。建物の基礎部分とそれをつなぐ梁部分のみの掘削工事を行う予定であったため、調査もその部分のみを行った(Fig.6)。

調査区内の北側には、木造校舎とプレハブがあり、その撤去に10月中旬までかかったため、最初に南側部分から先に調査を行い(PL.1)，木造校舎等が撤去された10月12日以降に残りの部分の調査を行った。

なお、基礎部分の工事掘削深度は90cmであったため、調査は地表下100cmまでとした。ただし、それ以上のレベルで検出された遺構についてはすべて掘り下げて調査を行った。基礎部分をそれぞれ、1～22トレンチとし、それをつなぐ梁の部分をa～bトレンチ(1トレンチと2トレンチの間は1-2トレンチ)と呼称した。

基本土層については、1層から5層までを確認した。しかし、南東部は掘削が地表下1.5～2mにまで及んでおり、プライマリーな層は残っていないかった。

掘削は層ごとに実施され、2～4層では遺構や遺物が確認できたので、それぞれの測量・写真撮影などを実施した。全体的に掘削は@cmまで留めたが、それ以下の層の確認のため、10トレンチの一部を地表下@cmまで深掘りした。掘削作業が終了した後は、土層の測量・写真撮影・観察などを行った後、調査を終了した。

2.4 層位 (Fig.2)

層位は1～5層までを確認した。このうち、4層は4a・4b・4c層と3つに細分された。いずれも整合的に堆積しているが、南東部は擾乱が深くまで及んでいて、プライマリーな層が残っていない部分も多かった。

1層 表土。コンクリートや瓦礫を含む。2～5層土がブロックもしくは混在した土層となって堆積している部分もある。大規模な掘削の後、掘削した土をまた埋め戻しているようである。



PL.1 調査区南側(1～8トレンチ)

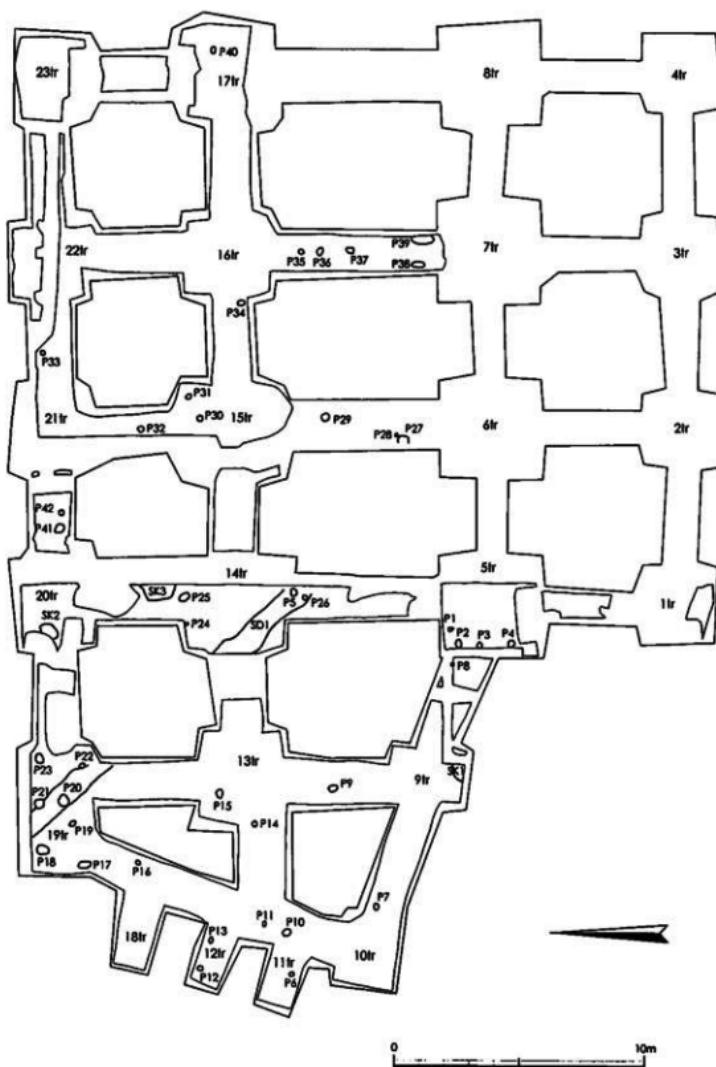


Fig.6 調査区と造橋配置図 (S=1/200)

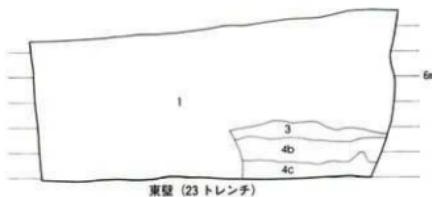
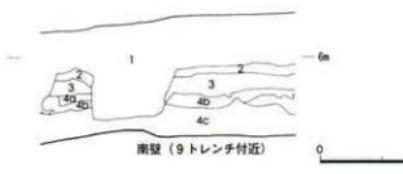
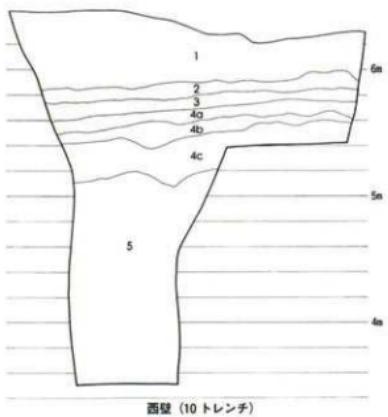


Fig.7 層位断面図 (S=1/30)



- 2層 暗灰色7.5YR4/1シルト質砂。
 3層 暗色7.5YR4/6シルト質砂。
 4a層 暗色7.5YR4/3砂混じりシルト。
 4b層 黒褐色10YR2/2シルト。
 4c層 黒色7.5YR2/1砂質シルト。
 5層 砂層。

このうち、遺構・遺物が確認できたのは、1～4層までである。

2.5 遺構

遺構は、3層中および4c層上面で確認した。3層ではSK1を、4c層上面では溝状遺構のSD1とピット43基を検出した。以下、遺構ごとに説明を加える。

SK1

調査区南側の9トレンチで検出した。検出層は3層中だが、埋土が2層土に類似していることなどから、本来は3層上面から掘り込まれていたものと考えられる。南側は調査区外に、東側は擾乱にかかっており、全形はわからぬ。残存部から、平面形は径1mほどの円形を呈すると推定できる。深さは最深部で13cmと浅い。底面は緩やかなレンズ状を呈し、立ち上がりはほぼ直立している。

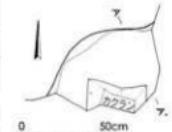
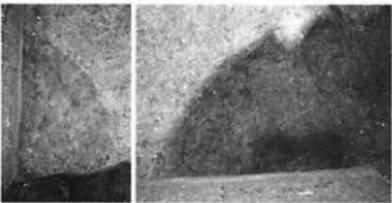


Fig. 8 SK1 (S=1/30)



PL. 5 SK1 左:検出状況, 右: 完掘状況

SK2

4c層上面で検出した。調査区北側の20トレンチに位置する。西側は一部擾乱のために壊されている。ほぼ梢円形で長径86cm、短径49cm(残存部のみ)を測る。北側に段を有し、南側はピット状を呈する。最深部で51cmの深さがある。埋土は、黒褐色10YR2/2シルトで4b層土

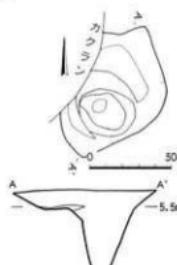
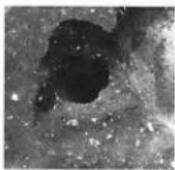


Fig. 9 SK2 (S=1/30)



PL. 6 SK2 完掘状況



PL. 7 SK2 埋土断面

に類似している。

SK3

5層上面でSK3を検出した。調査区中央部やや北よりの14-20トレンチに位置し、東側半分は擾乱に壊されている。残存部で長さ108cm、最深部は検出面から約30cmを測る。埋土は2層に細分される。埋土②は、5cmほど厚さで土壤の側面に沿って、その内側に埋土①が堆積している。

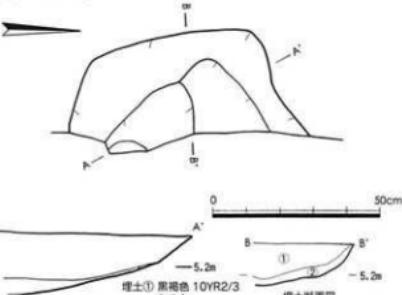
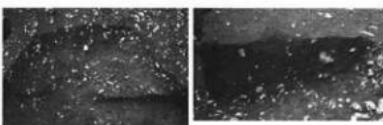


Fig. 10 SK3 (S=1/30) A: A-A', B: B-B'



PL. 8 SK3 左: 完掘状況, 右: 埋土断面

SD1

調査区北西部にSD1は位置する。5層上面の19トレンチと14トレンチで検出した。北西-南東方向を向いている。幅50～60cm、深さ約25cmで、横断面形は底面が平坦で台形状を呈する。埋土は5つに分層でき、レンズ状に落ち込んで堆積している。遺物は出土していない。



PL. 9 SD1 検出状況

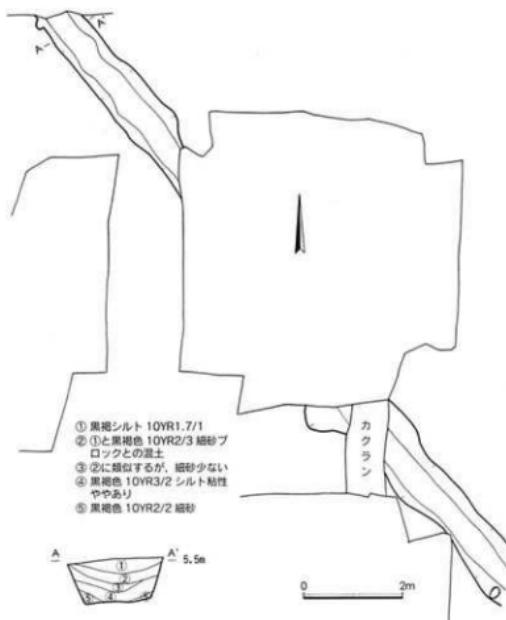
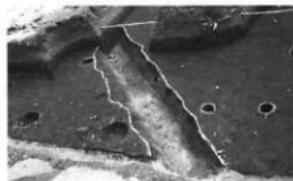


Fig. 11 SD1 (S=1/100)



PL. 11 SD1 実掘状況 (19トレンチ付近)

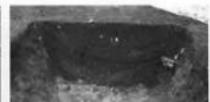


Fig. 12 SD1 埋土断面



PL. 10 SD1 (14トレンチ)

Tab. 2 ピット一覧表

	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	埋土
P1	26.0		10.7	黒色7.5VR2/1秒質シルト
P2	49.0	30.0	24.3	黒色7.5VR2/1秒質シルト
P3	26.0		11.3	黒色7.5VR2/1秒質シルト
P4	31.0		34.8	黒色7.5VR2/1秒質シルト
P5	33.9	24.8	19.3	黒色7.5VR2/1秒質シルト
P6	19.0		6.7	黒色7.5VR2/1秒質シルト
P7	29.5	17.5	20.6	黒色7.5VR2/1秒質シルト
P8	15.0		18.1	黒色7.5VR2/1秒質シルト
P9	34.0		17.9	黒色10YR1.7/1シルト
P10	31.5		23.3	黒色7.5VR2/1秒質シルト
P11	16.0		20.6	黒色7.5VR2/1秒質シルト
P12	28.0		17.0	14.1 黒色7.5VR2/1秒質シルト
P13	24.0		16.0	黒色7.5VR2/1秒質シルト
P14	23.0		15.0	14.3 黒色7.5VR2/1秒質シルト
P15	34.0		30.0	17.6 黒色7.5VR2/1秒質シルト
P16	24.0		15.0	13.5 黒色7.5VR2/1秒質シルト
P17	53.0		30.0	40.9 黒色7.5VR2/1秒質シルト
P18	26.0		19.0	16.3 黒色7.5VR2/1秒質シルト
P19	30.0		20.0	10.5 黒褐色10VR2/2細砂
P20	49.0		41.0	19.9 黒色7.5VR2/1秒質シルト
P21	41.0			36.2 黒色7.5VR2/1秒質シルト
P22	23.0			7.0 黑褐色10YR1.2細砂
P23	43.0		32.0	9.9 黑色7.5VR2/1秒質シルト
P24	10.0			9.9 黑色7.5VR2/1秒質シルト
P25	43.0		30.0	28.0 黑色7.5VR2/1秒質シルト
P26	29.0		14.0	11.8 黑色7.5VR2/1秒質シルト
P27	43.0			13.1 黑色7.5VR2/1秒質シルト
P28	17.0			10.0 黑色7.5VR2/1秒質シルト
P29	33.0			20.7 黑色7.5VR2/1秒質シルト
P30	23.0			23.5 黑色7.5VR2/1秒質シルト
P31	25.0		21.0	29.3 黑色7.5VR2/1秒質シルト
P32	27.0		21.0	18.0 黑色7.5VR2/1秒質シルト
P33	18.0			1.2 黑色7.5VR2/1秒質シルト
P34	29.0		21.0	18.1 黑色7.5VR2/1秒質シルト
P35	22.0			21.6 黑色7.5VR2/1秒質シルト
P36	34.0		23.0	21.9 黑色7.5VR2/1秒質シルト
P37	36.0		26.0	13.1 黑色7.5VR2/1秒質シルト
P38	60.0		25.0	19.6 黑色7.5VR2/1秒質シルト
P39	99.0		34* _a	25.4 黑色7.5VR2/1秒質シルト
P40	26.0		20.0	37.4 黑色7.5VR2/1秒質シルト
P41	44.5		38.0	24.8 黑褐色10VR2/3細砂
P42	20.0			25.4 黑褐色10VR2/2細砂
P43	24.0			18.5 黑色7.5VR2/1秒質シルト
P44	17.0			5.2 黑色7.5VR2/1秒質シルト

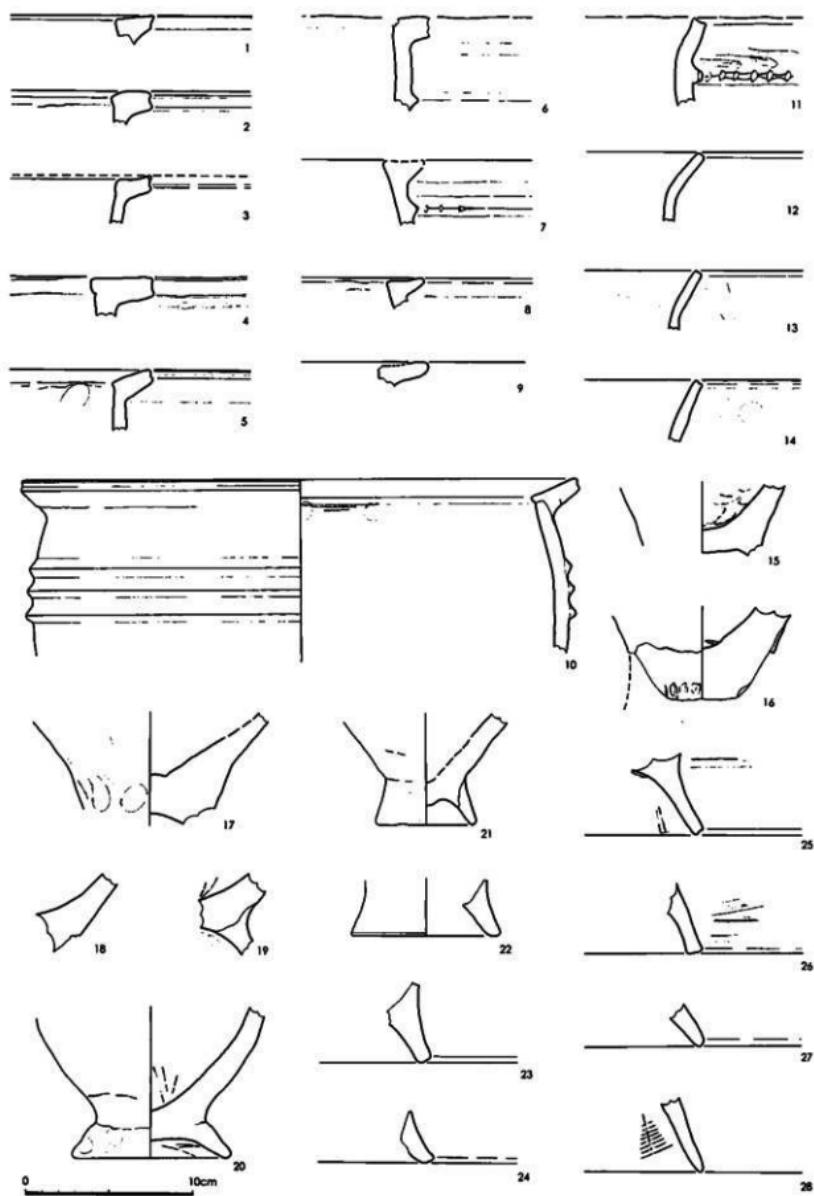
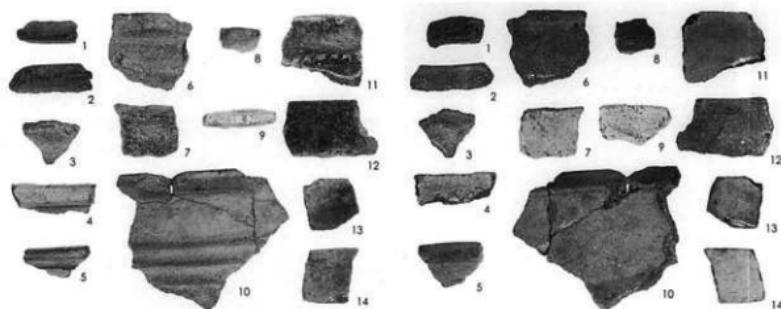
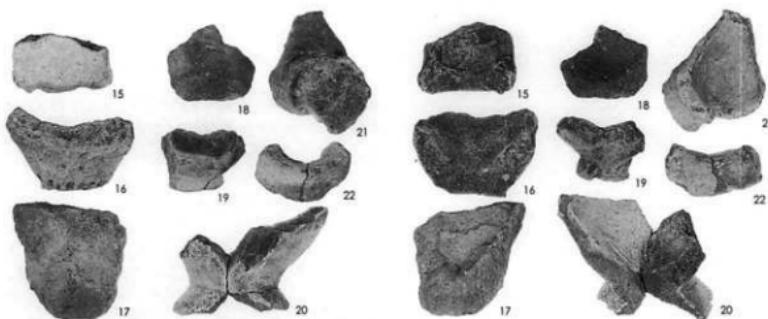


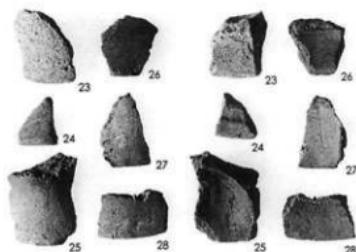
Fig.12 出土遺物 (1) (S=1/3)



PL.13 肋 (1~14 左:外面、右:内面)



PL.14 肋 (15~20 左:外面、右:内面)

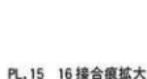


PL.16 肋 (21~28 左:外面、右:内面)

出土遺物の種類は、弥生土器、古墳時代の土器、須恵器、土師器、陶器、磁器、石鏡、土錘、擦り石で弥生時代中期から近代までの時期の遺物が散布していた。弥生・古墳時代の土器には、壺・壺・高杯・罐の器種が見られる。以下、実測できるものを図示し、説明をする。

壺(Fig.12)

1~4は入来Ⅱ式の壺の口縁部である。口唇部をヨコ



PL.15 16 接合痕拡大

ナデによって窪ませる形態を呈する。1は頭部に続く部分が接合部で欠損している。4は大型のものである。5・10は山口式の口縁部である。10は3条突帯を施し、シャープなつくりの胴部上半部である。口縁部の接合線が外面と内面に認められる。6は口唇部と口縁部内面が欠損しているため、型式は不明だが口縁部の立ち上がりから入来Ⅱ式に比定できそうである。7は口縁部上面が剥落しており、口唇部形態が不明だが、口唇部を丸く仕上げ、上面が少し窪むものと推定できる。小さな刻みをもつ刻み目突帯が1条施されている。8・9は端部は丸く、上面は少し窪むもので黒髪式の系統のものと考えられる。8は少し粗雑なつくりで、9は内面が一部欠損している。

11~14は弥生時代後期から古墳時代前期の範疇に入る壺の口縁部である。ゆるくくの字状に外反する形態

Tab. 3 遺物観察表 (1)

No.	層	種別	器質	部位	色調	土		調査	備考
						種類	形態の 歩合		
1-4c	你生	甕	口縁部	内外面・器内	褐色7.5W6/3.	粗砂: 手造粒、白色の雲母、細砂: 半透明 灰、白色灰、黑色灰、金色の雲母。	4	内外面: ヨコナダ、 内: ヨコナダ	結合度で大別。
2-4c	你生	甕	口縁部	内外面・器内	にぶい褐色 7.5W6/4.	粗砂: 白色灰、雲母: 白色灰、灰灰、赤色 灰、黑色灰、金色の雲母。細砂: 白色灰、黑 色灰、赤色灰、金色の雲母。	4	内外面: ヨコナダ、 内: ヨコナダ	外底スス付着
3-4c	你生	甕	口縁部	外縁	褐色7.5W6/4. 内面: にぶ い褐色7.5W6/4. 器内: にぶい黃 褐色10W6/4.	粗砂: 白色灰、石英、細砂: 白色灰、黑色 灰、赤色灰。	3	内外面: ヨコナダ	
4-1	你生	甕	口縁部	外縁	褐色7.5W6/4. 内 面: にぶい褐色7.5W6/4. 器内: にぶい褐色7.5W6/2.	粗砂: 硫黄石、白色灰、黑色灰、粗砂: 白色 灰、黑色灰、白色灰、角閃石、細砂: 白色 灰、黑色灰、赤色灰。	3	外縁: ヨコナダ、内 面: 條合帶+ユビオサエ	入底式。
5-4b	你生	甕	口縁部	外縁	褐色7.5W6/4. 内面: にぶ い褐色7.5W6/4. 器内: にぶい黃 褐色7.5W6/4.	粗砂: 白色灰、石英、赤色灰、金色の雲母、白 色灰、黑色灰、赤色灰、金色の雲母。細砂: 白色 灰、黑色灰、赤色灰、金色の雲母。	4	内外面: ヨコナダ、内 面: ユビオサエ	入底式、外縁に少 々スス付着。
6-1	你生	甕	口縁部	外縁	にぶい褐色7.5W6/4. 器内: 面: にぶい褐色7.5W6/4.	粗砂: 白色灰、赤色灰、細砂: 白色灰、黑色 灰、赤色灰、黑色灰。	4	外縁: ヨコナダ、内 面: ヨコナダ、ユビオサ エ有り	口縫部を欠く。
7-4b	你生	甕	口縁部	外縁	褐色7.5W6/4. 内面: 壁 面: にぶい褐色7.5W6/4.	粗砂: 白色灰、透明灰、黑色灰、赤色灰、 石2.5W7/6	3	外縁: ヨコナダ、内 面: ヨビオサエ	崩壊している。口縫 部上面表面剥離。
8-4b	你生	甕	口縁部	外縁	にぶい褐色7.5W6/4. 内面: 敷 分付着のため不明。器内: にぶい 褐色7.5W6/3.	粗砂: 白色灰、黑色灰、細砂: 白色灰、黑色 灰、白色灰、赤色灰。	3	ナダ、内面: ユビオサ エ	崩壊している。
9-4b	你生	甕	口縁部	上縁	にぶい褐色10W6/2. 外面は軟 付着	粗砂: 白色灰、黑色灰、赤色灰、角閃石、細 砂: 黑色灰、白色灰。	2	外縁: ヨコナダ、 内面: ヨビオサエ	崩壊している。口縫 部内面端面欠損。
10-4b	你生	甕	口縁部 .4c 土器	外縁	にぶい褐色7.5W6/4. 器内: にぶい褐色7.5W6/4.	粗砂: 金色の雲母、石英、硫黄石、細砂: 白色 灰、黑色灰、金色の雲母。	3	外縁: ヨコナダ、内 面: ナダ	口縫部 外縁に結合度あり。
11-1	你生	甕	口縁部 土器	外縁・内面:	にぶい褐色7.5W6/4. 器内: にぶい褐色2.5W6/2.	硫黄石、粗砂: 白色灰、黑色灰、角閃石、細 砂: 黑色灰、白色灰。	2	ハケ?~ヨコナダ、 内面スス付着。	
12-4b	你生	甕	口縁部	外縁	ススのため褐色10W6/2. 内 面: にぶい褐色10W6/2.	粗砂: 白色灰、透明灰、硫黄石、細砂: 白色 灰、黑色灰。	3	ヨコナダ、 外面スス付着。	
13-不 明 上縁	你生	甕	口縁部	にぶい褐色10W6/3.	粗砂: 白色灰、細砂: 白色灰、黑色灰。		ハケ(外縁) (内面 ハケ)	外縁スス付着。	
14-6	你生	甕	口縁部 土器	外縁	にぶい褐色7.5W6/2. 内面下 部: にぶい褐色2.5W6/2. 内面下部: 褐 色2.5W6/1.	粗砂: 白色灰、細砂: 白色灰、細砂: 白色 灰、黑色灰、褐色灰、黑色灰、赤色灰。	3	ヨコナダ、外縁にユビオ サエ	外縁スス付着。
15-6	你生	甕	底脚部 直	外縁	にぶい褐色10W6/2. 器内: にぶい褐色10W6/2. 器内: 褐 色2.5W6/1.	粗砂: 白色灰、黑色灰、石英、 角閃石、黑色灰。	3	外縁: ナダ、内面: ハ ケ?~ナダ	外縁に粘合部あ り。
16-6	你生	甕	底脚部 直	外縁	にぶい褐色10W6/4. 器内: にぶい褐色10W6/3. 器内: にぶ い褐色7.5W6/4.	粗砂: 褐灰、粗砂~粗砂: 白色灰、黑色灰、石 英、黑色灰。	4	ナダ?	脚部は結合部より欠 損。接合部に擦耗を 強化するために削み 化している。
17-4b	你生	甕	底脚部 直	外縁	にぶい褐色10W6/3. 器内: 面、細分付着のため不明	粗砂: 白色灰、黑色灰、角閃石、細砂: 白色 灰、黑色灰。		外縁、底部内面: ハケ ナダ、脚台内面: ナダ	
18-1	甕	底脚部 直	外縁	にぶい褐色10W6/3. 内 面、細分付着のため不明	粗砂: 白色灰、黑色灰、赤色灰。	3	調査不明		
19-6	甕	底脚部 直	外縁	にぶい赤褐色7.5W6/4. 内 面: にぶい赤褐色7.5W6/4. 器内: にぶい赤褐色7.5W6/4.	粗砂: 白色灰、黑色灰、赤色灰。	3	内面: 近底にハケ打込 跡部の一部が接合部 のみあり。脚台内面: ユ ビオサエ	脚部の一部が接合部 より剥落	
20-1	甕	底脚部 平~直	外縁	にぶい褐色10W6/2. 器内: にぶい褐色10W6/2. 器内: にぶい褐色10W6/2.	粗砂: 白色灰、角閃石、細砂: 白色灰、角 閃石、黑色灰、細砂: 白色灰、黑色灰。	3	外縁: ナダ、内面: ハ ケ?~ナダ	外縁脚台接合部に接 合部あり。	
21-4b	甕	底脚部 平~直	外縁	にぶい褐色7.5W6/4. 内 面: にぶい褐色7.5W6/4. 器内: にぶい褐色10W6/2. 器内: にぶい褐色10W6/2.	粗砂: 硫黄石、白色灰、細砂: 白色灰、黑色 灰、角閃石、石英、細砂: 白色灰、黑色灰。	3	外縁: ユビオサエのち日 光下コロリ	脚部の一部が接合部 より剥落	
22-4b .3	甕	底脚部	外縁	にぶい褐色10W6/3. 内 面: にぶい褐色10W6/4. 器内: に ぶい褐色5W6/4.	粗砂: 白色灰、硫黄石、細砂: 白色灰、黑色 灰、角閃石、石英、細砂: 白色灰、黑色灰。 にぶい褐色5W6/4.	3	ナダ?	接合部より剥落した 脚部	
23-4b	甕	底脚部	外縁	にぶい褐色7.5W6/3. 内 面: にぶい褐色10W6/2. 器内: にぶい褐色10W6/2.	粗砂: 硫黄石、白色灰、細砂: 白色灰、黑色 灰、角閃石、石英、細砂: 白色灰、黑色灰。	4	調査のため不明。	接合部より剥落した 脚部	
24-1	甕	底脚部	外縁	にぶい褐色7.5W6/4. 器内: にぶい褐色2.5W6/4.	粗砂: 白色灰、黑色灰、角閃石、細砂: 白色 灰、白色灰。	3	ナダ?	接合部で大崩。	
25-4 層 上 面	甕	底脚部	外縁	にぶい褐色10W6/3. 内 面: 細分付着のため不明	粗砂: 白色灰、黑色灰、角閃石、細砂: 白色 灰、黑色灰。	3	外縁: ハケ(-)~ナ ダ、内面: ハケ(+)~ナ ダ		
26-4b	甕	底脚部	外縁	にぶい褐色7.5W6/4. 内 面: 細分付着のため不明	粗砂: 白色灰、黑色灰、金色の雲母。	2	内外面: ヨコナダ		
27-4b	甕	底脚部	外縁	にぶい赤褐色7.5W6/4. 脚 付着部: 10W6/2. 内面: にぶ い褐色7.5W6/4. 器内: 黑 色	粗砂: 赤色灰、細砂: 白色灰、細砂: 白色 灰、黑色灰、赤色灰。	3	外縁脚部: ヨコナダ、 他: ナダ。		
28-4b	甕	底脚部	外縁	にぶい褐色7.5W6/3. 内 面: にぶい褐色10W6/2. 器内: にぶい褐色7.5W6/4.	粗砂: 白色灰、細砂: 白色灰、細砂: 白色 灰、黑色灰。	2	外縁: ヨコナダ、内 面: ハケ(+)~ナダ		

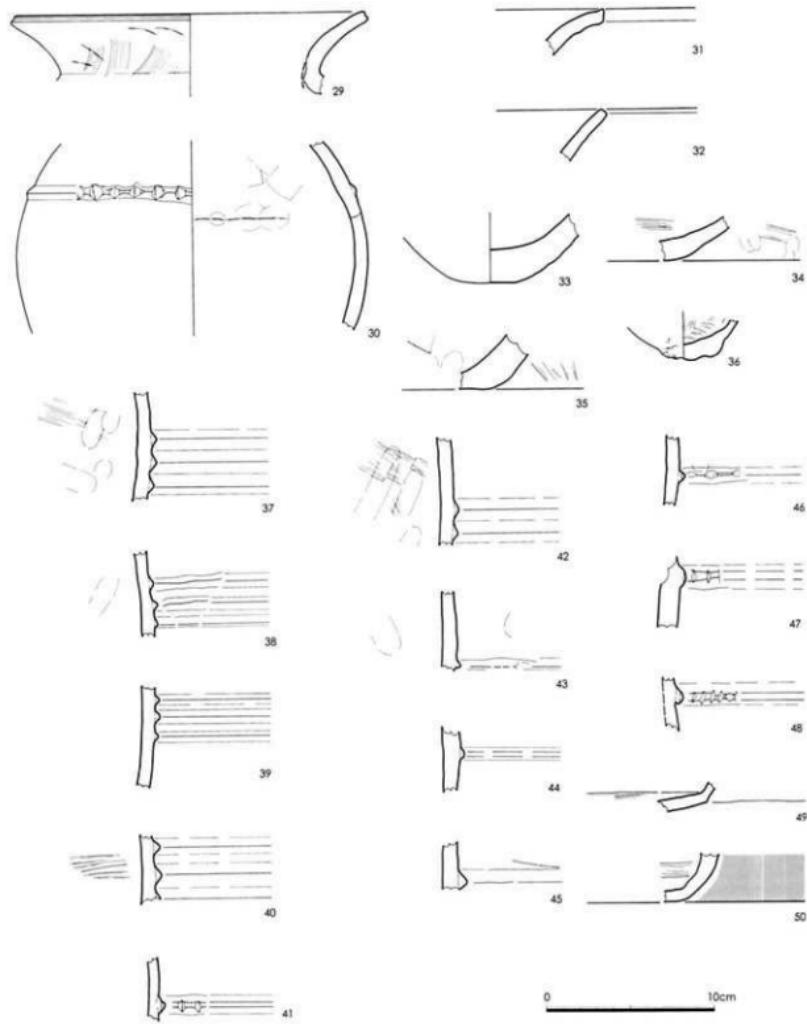


Fig.13 出土遺物 (2) (S=1/3)

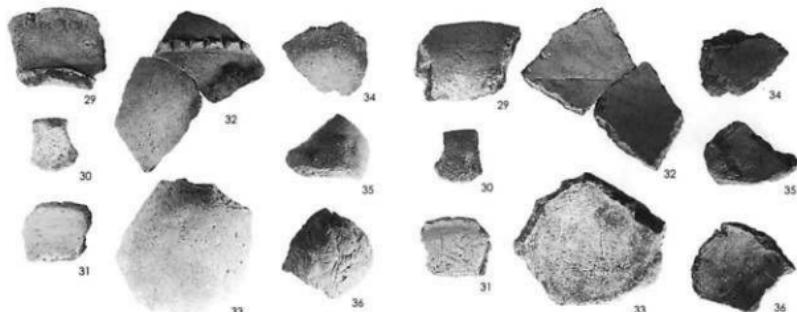
が特徴である。いずれも、口唇部はヨコナデによって仕上げるため、平坦または窪んでいる。11には外面に1条刻み目突帯が施されている。

15～28は壺の底部付近の破片である。15～19は脚部は欠損している。これらから、バケツ型の体部を作成

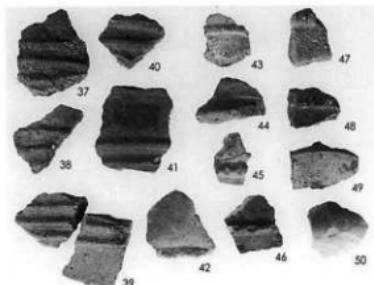
した後、輪状の脚台を外側に貼り付ける制作方法であったことがわかる。16は接合部に接合を補強するための刻みを巡らしている。20・21は底部付近の破片で、脚台は低い。22～24は脚部の破片で、体部との接合部で欠損している。いずれも低めの脚部である。25～28

Tab. 4 出土遺物観察表(2)

No.	層	種別	器種	部位	色調	胎土		調整	備考
						混和材	砂粒の多さ		
29 4	生	甕	口縁部	外表面: にぶ・黄褐色10YR6/3、内表面: にぶ・黄褐色10YR7/3、器内: 灰色5Y4/1。	裏: 白色粒・赤色粒、粗砂: 白色粒・黑色粒・赤色粒、石英、細砂: 白色粒・黑色粒・赤色粒。	3	外面: ハケ(+)→ナダ。内面: ナダ。		
30 4b	甕	口縁部			裏: 石英、粗砂: 白色粒・石英、細砂: 白色粒・赤色粒。	3	ナダ。		
31 1		口縁部	外表面: 淡黄褐色10YR7/3、内表面: 铁分付青、器内: 黄褐色10YR6/2。		粗砂: 白色粒・黑色粒・石英、細砂: 黑色粒・白色粒。	4	調整不明		
32 4b	生	甕	肩部~底	外表面・内表面: にぶ・橙色7.5YR6/4、器内: 灰褐色2.5YR5/4。	裏: 粘石・砂粒・磁鐵粒: 白色粒・黑色粒・石英。	3	外面: 突堤付近はヨコナ、内面接合線あり。他はナダ、内面: ナダ。		
33 4	生	甕	底部	外表面: にぶ・黄褐色10YR6/4、内表面: にぶ・褐色7.5YR6/4、器内: 灰褐色・黑色粒・角閃石。	裏: 粘石・粗砂: 白色粒・黑色粒・角閃石。	3	ナダ。		
34 4a	甕	底部		外表面: にぶ・赤褐色5YR5/4、内表面: 器内: 赤褐色のため不明。	裏: 白色粒、粗砂: 白色粒・石英・黑色粒、角閃石・黑色粒。	3	外面: ハケ(+)→ナダ。内面: ナダ。		
35 1	甕	底部		外表面: にぶ・黄褐色10YR6/4、内表面: 器内: 灰褐色10YR6/2。	粗砂: 白色粒・赤色粒・黑色粒・角閃石・細砂: 白色粒・黑色粒・赤色粒。	3	ナダ。		
36 4b	甕	底部		外表面: にぶ・褐色7.5YR4/4~にぶ・黄色10YR3/4。	粗砂: 白色粒・黑色粒・石英・粘石。	3	織維状の工具によるナダ。非常に粗雑。		
37 1	生	甕	胴部旁	外表面: 灰褐色2.5YR4/4、内表面: にぶ・褐色7.5YR6/3、器内: にぶ・黄褐色・粘石・粗砂: 白色粒・金色の雲母・黑色粒・石英・粘石・細砂: 白色粒・黑色粒・金色の雲母。	3	外面: ヨコナダ。			
38 1	生	甕	胴部旁	外表面: にぶ・褐色7.5YR4/4、内表面: 器内: にぶ・灰褐色・粘石・粗砂: 白色粒・黑色粒・石英・粘石・細砂: 白色粒・黑色粒・金色の雲母。	3	外面: ヨコナダ。			
39 4b	生	甕	胴部旁	外表面: にぶ・赤褐色5YR4/4、内表面: 器内: にぶ・褐色7.5YR4/4。	粗砂: 白色粒・角閃石・金色の雲母・粘石、4色7.5YR4/4。	4	外面: ヨコナダ。内面: ナダ。		
40 1	生	甕	胴部旁	外表面・内表面: にぶ・黄褐色10YR6/3、内表面: にぶ・褐色7.5YR6/3。	粗砂: 白色粒・金色の雲母・黑色粒、細砂: 白色粒・黑色粒・金色の雲母。	3	外面: ヨコナダ。内面: ハケ(+)→ナダ。	外表面ス付番。	
41 1	生	甕	胴部旁	外表面: 灰褐色2.5YR4/3、内表面: にぶ・褐色7.5YR5/4、器内: 灰褐色。	粗砂: 白色粒・金色の雲母・粘石、細砂: 白色粒・黑色粒・金色の雲母。	3	外面: ヨコナダ。内面: ハケ(+)→ナダ。	外表面ス付番。	
42 1		胴部旁		外表面: にぶ・黄褐色10YR6/3、内表面: 淡黄褐色10YR6/4、器内: 灰褐色。	粗砂: 白色粒・角閃石、細砂: 角閃石・黑色粒・赤色粒。	4	ナダ。		
43 1		胴部旁		外表面: にぶ・褐色7.5YR7/3、内表面: 器内: にぶ・褐色7.5YR6/4。	粗砂: 白色粒、粗砂: 白色粒・赤色粒、細砂: 金色の雲母。	3	ナダ。		
44 4b	生	甕?	胴部旁	外表面・内表面: にぶ・褐色7.5YR5/3。	粗砂: 白色粒・金色の雲母・透明、4色7.5YR5/3。	4	外面: ヨコナダ。内面: ナダ。		
45 4b	甕	胴部旁		外表面: 灰褐色2.5YR6/6、内表面: 器内: 黄褐色。	粗砂: 白色粒・黑色粒・赤色粒・透明。	3	外面: ヨコナダ。内面: ナダ。		
46 4	甕?	胴部旁		外表面: 灰褐色2.5YR5/2、内表面: にぶ・褐色7.5YR6/4、器内: 明灰岩。	粗砂: 白色粒・赤色粒・石英・角閃石・黑色粒。	3	外面: ヨコナダ。内面: ナダ。		
47 1	生	甕	胴部旁	外表面: にぶ・褐色7.5YR6/4、内表面: にぶ・褐色7.5YR6/4、器内: 明灰岩。	粗砂: 粘石・細砂: 白色粒・透明粒・黑色粒・赤色粒。	3	ナダ? 磨滅している		
48 4b	生	甕?	胴部旁	外表面: にぶ・黄褐色10YR6/4、剥落部。	粗砂: 粘石・粗砂: 白色粒・細砂: 白色粒・黑色粒。	3	外面: ヨコナダ。内面: ス付番。		
49 4b	生	高杯 小古 壇	杯部	外表面: にぶ・褐色2.5YR6/3、内表面: 黑褐色2.5YR1/L、器内: 黄褐色2.5YR4/1。	粗砂: 白色粒・石英・黑曜石、細砂: 白色粒・黑色粒。	3	外面: ヨコナダ。内面: ハケ(+)→ナダ。		
50 4b	古墳	壇	底部	外表面: にぶ・黄褐色10YR7/3、外表面: 黑褐色2.5YR5/1、内表面: 黄褐色10YR5/1。	粗砂: 黑色粒・白色粒・角閃石。	2	外面: ナダ? 内面: 横・外面・底面赤色傾斜方向のナダ。		



PL. 17 壺(29~36) 左: 外面、右: 内面



PL.18 突蒂 (37 ~ 48) ・高杯 (49) ・壺 (50)

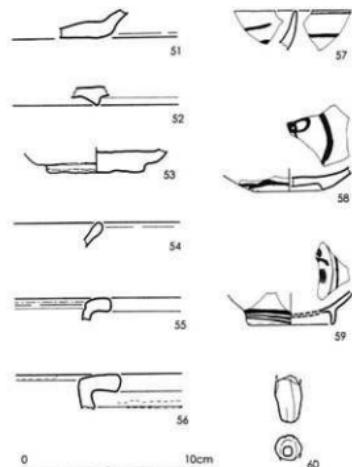
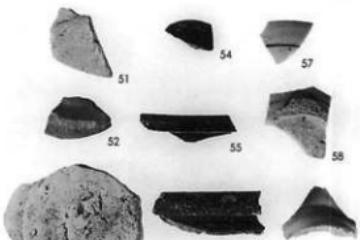


Fig.14 出土遺物 (3) (S=1/3)

Tab.5 出土遺物観察表 (3)



PL.19 土師器 (51 ~ 53) ・陶磁器 (54 ~ 59) 上：外面、下：内面



PL.20 土錐 (60)

No.	層 番	種 類	器種	部位	色調	粘土		調整	備考
						混和材	砂粒の 多さ		
51	3	土師	杯	底部	内面：器肉；淡黃褐色2.5YR8/4. 外面；暗褐色5YR6/6.	粗砂；赤色粒。 細砂；黑色粒・白色粒。	2	ナデ？.	外面赤色顔料混入？
52	3	土師	杯	底部	内外面；部分付着のため不明。器 内；暗褐色5YR6/6.	細砂；白色粒。	1	回転ナデ。	
53	1	土師	杯	底部	外表面；淡黃褐色10YR8/3. 内面；器 内；灰白色10W8/2.	粗砂；赤色粒。 細砂；赤色粒・黑色粒。	1	外表面；回転ナ デ。内面；ヘラきり ナデ。	準備している。
54	2	陶器	不明	口縁部 部？	内外面施釉部分；黑色2.5YR2/1. 無釉部分；灰褐色5YR8/2.	砂粒；白色粒。	1	回転ナデ？.	
55	1	陶器	钵	口縁部	外面施釉部分；7.5YR1/1土リープ器。 内面；灰褐色5YR8/2.	粗砂；白色粒・透明粒・赤色粒。 無釉部；器肉；灰褐色5YR8/2.	2	口縁部上面；釉ふき 取り。他；施釉。回 転ナデ。	口縁部上面；釉ふき 取り。他；施釉。回 転ナデ。
56	1	陶器	钵？	D縁部	内外面施釉部分；黑色2.5YR2/2. 無釉部分；にぶい赤褐色2.5YR4/3. 器肉；5YR5/6.	粗砂；白色粒。 細砂；黑色粒・白色粒。	2	口縁部上面；釉ふき 取り。他；施釉。回 転ナデ。	
57	1	染器	甕	D縁部	猪輪部分；灰白色10Y7/1. 瓶頸； 綠灰色10G5/1. 瓶底；灰白色5YR8/.	粗砂粒；白色粒。	1		
58	1	染器	甕	底部	瓶輪部分；灰褐色5YR7/2. 瓶頸； 青褐色。瓶底；灰白色5YR8/1.	粗砂粒；黑色粒。	1	高台内面；無釉。窯 盤底分貰入り。	
59	1	染器	甕	底部	瓶輪部分；明灰褐色6G7/1. 瓶 頸；青褐色。瓶底；灰白色5YR8/.	粗砂粒；白色粒。	1	高台底部；釉ふき取 り。	
60	2	土錐			内外面；にぶい黄褐色10YR7/3. 器 内；明褐色2.5YR5/6.	粗砂；白色粒・黑色粒・赤色粒・石英・角閃 石。	3	ナデ。	

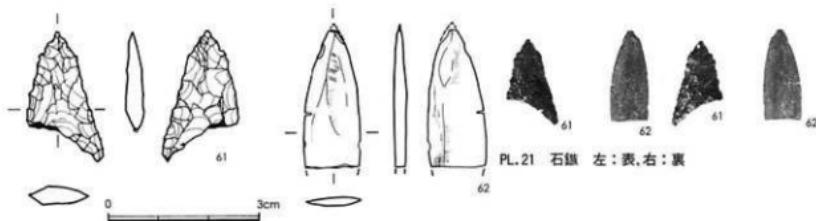


Fig.15 石器 (S=1/1)

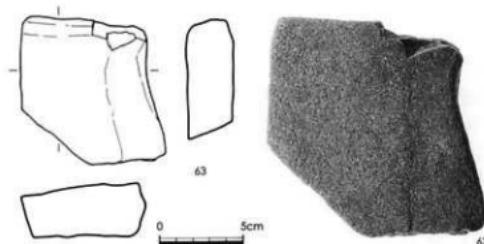


Fig.16 擦り石 (S=1/3)

PL.22 擦り石 (63)

は器壁も若干細く、長めの脚部である。

壺 (Fig.13 29~36)

29~31は口縁部の破片である。29は反りながら外に開き、口唇部はヨコナデによって窪んでいる。頭部内面は表面が剥落している。

32は胴部で、胴部最大径部分より上に1条の刻み目突帯が施されている。内面には、粘土帯接合線が認められ、そこを押えたユビオサエの痕が残っている。33~36は底部の破片である。33・34は少し平底が残るが、立ち上がりは明瞭ではない。35は底面が厚く丸みを帯びている。36は、粗雑なつくりで、内外面ともにあらい工具痕が認められる。

突帯 (Fig.13 37~48)

突帯が付いている胴部片で、器種が判然としなかったものをここにまとめた。37~41は複数突帯の胴部片である。断面三角形の突帯を2~3条施したものである。42~48は1条突帯の胴部片である。42・44は突帯直下で欠損しているので、あるいは複数突帯の一部かもしれない。43は断面台形の低い突帯である。45~48は刻目突帯である。刻目の断面は直線的であるため、刻みに使用した工具はヘラ状の硬く直線的な工具だと考えられる。

高杯 (Fig.13 49)

49は杯部の一部である。シャープに屈曲することから、中津野式か東原式の大きく外反する口縁部形態を

持つ高杯の破片だろうと推定できる。

壇 (Fig.13 50)

50は壇の底部である。外面には赤色顔料が添付されている。内面は調整が粗雑で表面の凹凸が著しい。

土師器 (Fig.14 51~53)

51は古代土師器杯の底部である。底面はヘラ切りで、外反気味に立ち上がる。52は高台の破片で、高台は、断面三角形状を呈し、小さい。53は一見高台状の底部だが、底面は平底で厚く、ヘラ切りである。粗雑な調整である。

陶器 (Fig.14 54~56)

54~56はいわゆる黒薩摩の破片である。54は口縁部で、端部は丸く仕上げている。55・56は深鉢の口縁部で、端部が太いL字状を呈する。口縁部上面は軸を引き取っている。57~59は染付けの破片である。57は椀か皿の口縁部で、内湾気味に立ち上がる器形を呈する。58は削り出しの高台を持つ底部である。高台内面は無軸である。59は椀の底部である。

土鍤 (Fig.14 60)

60は筒状の土鍤だが、片方の端部が欠損している。胴部の中ほどで膨らむ形を呈する。

石器 (Fig.15 61・62)

61は打製石器である。黒曜石製で、基部がえぐれている。また、その抉れた部分から基部の片方が欠損している。残存部のみで0.93 gを測る。62は磨製石器である。下部は欠損しているため基部の形態は不明だが、扁平で錐はない。ホルンフェルス製で、現状で0.94 gを測る。

擦り石 (Fig.16)

62は砂岩製で395gを測る。ひとつの面に平坦な擦り面を持つものだが、擦り面は右側にゆるく低い段を有している。段より左側は滑らかな平坦面だが、右側は表面があがっている。その裏面と側面には顯著な擦り面は認められない。側面には、自然面と打ち欠いた面があるが、擦り面がその面の際までついていないことから、この大きさで使用していたものと考えられる。

Tab.6 層別遺物出土数

	弥生中期土器	弥生後期～古墳時代の土器	土師器	須恵器	土器	陶磁器	石器	土錐
1層	6	7	1		118	10		
2層					5	2		1
3層		1	3	3	38			
4a層			1			17		
4b層	6	16			181		1	
4c層	3				16	2		
4d層		2			48			
SK1					1			
SK2					1			

2.7まとめ

層について

本調査区では、近世から弥生時代中期までの遺物および造構を確認した。各層の遺物出土状況から2層は近世、3層は古代、4層は古墳時代から弥生時代中期の時期の包含層であることが確定できる。また、4層は3つに分層でき、4C層は入来式と山ノ口式が出土し、弥生時代後期以降の出土遺物は出土していないことから、弥生時代中期の層である可能性が高い。弥生時代中期の遺物に関しては、郡元団地内でしばしば出土していたが、いずれも古墳時代遺物包含層に混在していた。また、古墳時代の住居跡が検出される部分が多くなったため、古墳時代に住居を建てたのに伴ってもともとあった弥生時代の遺物包含層が搅乱されたと推定していた。本調査で初めて、弥生時代中期の遺物包含層が確認でき、溝状造構もそれに伴うことから、弥生時代中期の時期にすでに居住などを目的とした人間活動が郡元団地内で行われていたことがわかつた。

造構について

造構については、3層中より土坑状造構が1基、4C層上面より土坑1基、5層上面より土坑1基、ビット群が検出された。3層中から検出したSK1は3層上面から掘り込まれていた可能性が高く、埋土が2層土を含んでいたことから、近世のものであると考えられる。調査区の壁際で検出されたため、平面形の1/4程度しかわからないが、平面は径1mの円形を呈するものと考えられる。断面形態など類似する造構としては、平成元年度に発掘調査を実施した郡元団地F-3・4区（大学院連合農学研究科）で検出された円形の土坑がある¹⁾。

4C層上面で検出された造構はSK2だが、これはビット状で、他のビットの中にも検出面は5C層上面だが、埋土がSK2に類似するものがあるため、4C層上面にいくつかのビットがあったものと考えられる。ただし、配列などは不明である。造構内からの出土遺物がほとんどないため、それぞれの時期は不明だが、直上の4b層

が弥生時代中期から古墳時代の包含層であるため、この時期幅で考えたい。

5層上面で検出した造構は、SK3とSD1、それからビットである。どの造構からも遺物は出土していない。埋土が4C層に類似していることなど

から、弥生時代中期頃と推定できる。これらの造構に関連性があるかどうかは不明である。

遺物について

遺物は、弥生時代中期の入来式、山ノ口式、後期の高付式、中津野式、古墳時代後半期の舷貫式の土器、土師器、陶磁器、土錐、磨製石錐、打製石錐、擦り石が出土している。ほとんど小片で、包含層より散発的に出土するため、近くで使用されていたものが廃棄され、流れ込んだと考えられる。

これらの遺物のうち、入来式・山ノ口式の土器片の胎土に金色の雲母が混入しているものがある。中期の土器片であると考えられるものの半分以上を占める。もともと、郡元団地内から出土する遺物には胎土に金色の雲母が混入されているものは少ない。金色の雲母が混入された土器はこの遺跡内では作っていないと仮定すると、本遺跡から出土する中期土器のほとんどが他地域から持ち込まれた搬入品であるということになる。

また、山ノ口式は大隅半島と薩摩半島東部を中心として分布する土器様式だが、他の土器様式に比べて金色の雲母が混入しているものが多い。「山ノ口式土器」として、金色の雲母を混入することが重要な要素であると、当時の人々に認識されていたとすれば、地元近くで取れる砂粒や粘土にはない金色の雲母をわざわざ入手して作成したということも考えられる。

詳細な胎土分析の必要があるだろうが、これが明らかになれば地域間交流や、日常の生活道具である土器についての当時の人々の趣向性を知る上で、重要な資料であるといえる。今後、この土器についての多角的な胎土分析を行っていく予定である。

註

- 1) 松永幸男・砂田光紀 「第3章 鹿児島大学郡元団地F-3・4区（大学院連合農学研究科合建設予定地）における発掘調査報告」鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報V 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1990

3 郡元団地K-9区(総合研究棟II建設予定地)における試掘調査報告

3.1 調査にいたる経過

鹿児島大学では、郡元団地内に総合研究棟(理工系)¹⁾の建設が計画され、理学部西側のサークル棟跡地がその予定地とされた。本地点周辺の過去の発掘調査としては、昭和60年に理学部1号館増築に伴う発掘調査が行われており、古墳時代の住居址が密集して検出されている。また、平成9年の工学部大学校舎建設に伴う発掘調査においては、中世から绳文時代にわたる遺物包含層、および弥生時代の水田の可能性が高い遺構を確認している。これらのことから、本地点においても埋蔵文化財が埋蔵されていることが推定された。そのため、埋蔵文化財調査室では遺構および遺物包含層の有無を確認するため、試掘調査を行うことになった。

3.2 調査の体制

発掘調査は以下の体制で行った。



PL.23 挖削開始の様子

調査主体者 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

室長 新田栄治

調査担当 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

室員 寒川朋枝

調査作業員 谷口ノリ・松下ミチ・西庄司・稲崎幸造・脇ツルエ・脇俊子

3.3 調査の経過

調査は平成14年3月13日～26日にかけて実施した。総合研究棟建設予定地南側に2×2mのトレンチを設定した(Fig. 1)。

トレンチ南側半分は、配管埋設のため約2mの深さまでほぼ垂直に掘り込まれておらず、擾乱層であった。北側1m幅を地表下1.3mまで掘り下げたところ、古墳時代の遺物包含層である8層に達した。遺物は小片6点のみにとどまる。さらに、地表下1.6mで露出する12層は水田層と考えられる層で、その上面では稻株跡かと思われる小ビット群を検出し、13層上面ではトレンチ北西部に、長径約20～30cm、短径約20cmの楕円状の浅い窪みを3基検出した。13層上面の遺構を検出した時点で下層の層位確認のためトレンチ北西部を残し、北東部約70cm四方をさらに掘り下げた。地表下2.4mの深さで、地山である砂層上面が確認できた。この時点で層位断面図を作成し、プランツ・オパール分析等のための土壌のサンプリングを行い、埋め戻しを行って調査を終了した。

3.4 層位 (Fig.17)

1層 表土層、客土等を一括した。

2層 黒褐色10YR3/2シルト質砂。粘性は帯びず、しまっている。1cm大までのバミスを少量含む。鉄分が薄くまだらに混ざる。

3層 黒褐色7.5YR3/2シルト質砂。粘性は帯びず、しまっている。1cm大までのバミスを少量含む。暗褐色10YR3/3の鉄分を筋状に含む。

4層 黒褐色7.5YR3/2シルト質砂。粘性は帯びず、しまっている。3層に比べや

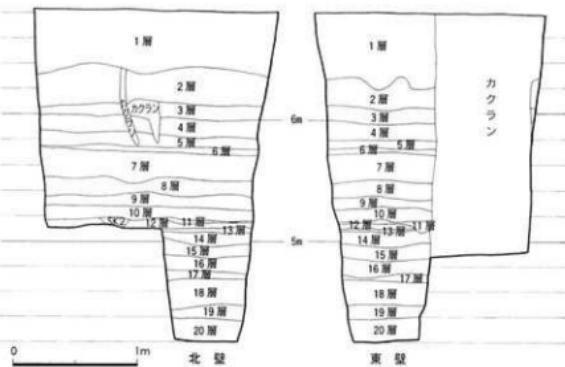


Fig.17 層位断面図(S=1/40)

- や色調は明るい。1cm 大までのバミスを含む。鉄分の密度は 3・4 層が最も高い。
- 5 層 黒褐色 10YR3/2 シルト質砂。粘性は帶びず。しまっている。1cm 大までのバミスを含む。黒褐色 7.5YR3/2 の鉄分を含む。
- 6 層 灰褐色 7.5YR4/2 シルト質砂。粘性は帶びず。しまっている。1cm 大までバミス含む。黒褐色 7.5YR3/2 の鉄分を含む。
- 7 層 灰褐色 7.5YR4/2 シルト質砂。粘性は帶びず。しまっている。1cm 大までのバミスを少量含む。鉄分を少量含む。
- 8 層 褐灰色 7.5YR4/1 シルト質砂。やや粘性をおび、しまっている。上層部に黒褐色 10YR3/2 の鉄分を含む。成川式土器の小片を含む。
- 9 層 灰褐色 7.5YR4/2 シルト質砂。粘性は強く、しまっている。鉄分を少量含む。
- 10 層 褐灰色 7.5YR4/1 シルト質砂。粘性を帶び、しまっている。鉄分を少量含む。
- 11 層 灰褐色 7.5YR4/2 シルト質砂。粘性を帶び、しまっている。
- 12 層 東側は、にぶい黄褐色 10YR5/3 シルト。粘性は強く、しまっている。鉄分を含む。西側は、色調がやや暗くなり。灰黄褐色 10YR4/2 シルト。鉄分は少ない。特に、跡の可能性が考えられる SK 2 の断面は黒褐色 10YR3/2, 7.5YR3/1 シルトのブロックがまだらに混ざる。鉄分は少ない。
- 13 層 黒褐色 5YR2/1 シルト。やや粘性を帶び、しまっている。極少量鉄分を含む。断面をみると、13 層上面は凹凸が見られる。



PL.24 北壁層位

- 14 層 黒褐色
7.5YR3/1 シルト。
粘性を帶び、しまっている。鉄分を少量含む。
- 15 層 黒褐色
5YR3/1 シルト。
粘性を帶び、しまっている。極少量鉄分を含む。
- 16 層 黒色 10YR2/1
シルト。粘性を帶び、しまっており固い。15 層との境に鉄分が含まれる。
- 17 層 黒褐色

10YR3/2 粗砂。しまっている。下部に鉄分が少量含まれる。

18 層 黒色 N2/泥炭層。部分的にしまっており、木の皮や葉が多く含まれる。

19 層 黒褐色 5YR2/1 シルト。粘性は帶びず、しまっている。泥炭層土が少量混ざる。2, 3 cm 大の軽石礫が混ざる。特に上部にはまとまって含まれる。

20 層 黒褐色 7.5YR2/2 粗砂混じりシルト。

3.5 遺構と遺物

遺構

遺構は、12 層上面、13 層上面で確認した。12 層上面では、径 4 ~ 5 cm のビットが 5 つ検出された (Fig. 18)。12 層は、1997 年度に実施した郡元団地 J・K-10・11 区の発掘調査で水田層の可能性が高いとされた 9 層と同一層と考えられ、9 層上面からも類似する直径 5 cm、深さ 3 ~ 7 cm のビットが確認されている。これらは、水田遺構でよく確認される稻株痕と呼ばれる遺構に類似し



PL.25 12 層上面ビット検出状況

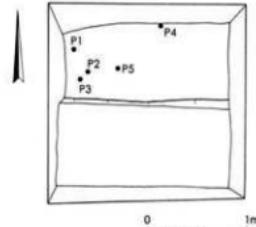


Fig.18 12 層上面検出ビット配置図 (S=1/50)



PL. 26 13層上面検出 SK1 ~ 3 左: 検出状況、右: SK1 実掘状況

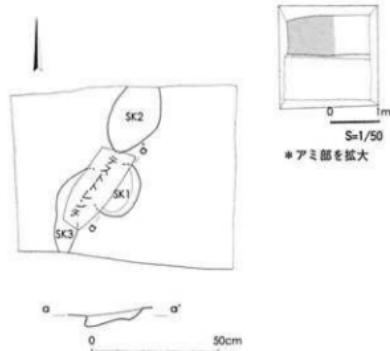


Fig. 19 SK1 ~ 3 (S=1/20)

ているが、今回の調査では検出密度が低く、並びも見出せない状態であった。

13層上面では、短径約20cm、長径約20~30cmの梢円状の浅い窪みが3基検出された(Fig. 19)。これらの窪みは北東-南西の方角に並んでおり、その窪みを境として西側で13層上面の著しい凹凸がみられた。こうしたことから、これらの浅い窪みは小畦を作る際の鋤跡である可能性が考えられる。このうちSK1のみを実掘した。埋土は灰褐色10YR6/2シルトを主体とし、黒褐色10YR3/1シルトがブロック状に混ざる。粘性は強く、しまっている。断面は、南側へやや傾斜するように



深くなっているが、最深部は4cm程度である。

包含層出土遺物

総出土遺物数は27点であった。層別出土状況はTab. 7に示す。その中から、Fig. 20に実測したものを見た。



Tab. 7 層別遺物出土状況

層	陶磁器	土器	古墳時代の土器
2		2	
3	1	14	
4		4	
8	5		1

PL. 27 出土遺物 (左: 外面、右: 内面)

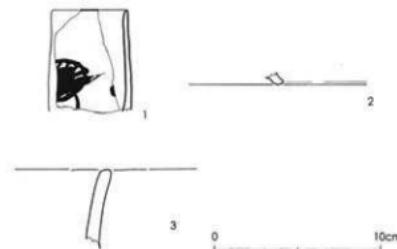


Fig. 20 出土遺物 (S=1/3)

Tab. 8 出土遺物観察表

No.	層	種別	岩種	部位	色調・釉調	胎土	砂粒の多さ	調整・文様	備考
1	2	陶磁器	口縁部	外面・内面: 灰白色10YR8/1, 器肉: 白色 灰白色5Y8/1		白色	0	施釉	
2	2	土器	高台	脚部	外面・内面・器肉: にぶい橙色5W7/4	微細な黑色粒、白色粒をわずかに含む	1	回転ナデ	磨滅している
3	8	土器	甕	口縁部	外面: にぶい褐色7.5W5/3, 内面: にぶい黄褐色10W7/2, 器肉: 堀灰褐色10YR5/1	細砂粒、砂粒: 赤色粒、黒色粒、白色粒、石英種: 黒色粒をわずかに含む	3	外面: ヨコナデ	煤付着

1 は 3 層出土の磁器である。2 は 3 層出土の土師器であり、高台の端部と思われる。3 は 8 層出土の古墳時代の壺の口縁部で、広口でやや外開きに直立すると思われる。

3.6 試掘調査の結果

試掘調査の結果、調査区付近では上部に中近世のものと考えられる水田層や遺物包含層が複数枚広がり、その下に古墳時代の包含層、さらにその下には弥生時代の水田跡と推定される層が確認できた。しかし、古墳時代包含層において遺構は検出されず、今までの調査から想定されていたように、古墳時代の住居群の範囲は本調査区付近には及ばないと考えられる。平成 14 年度より開始される本調査（郡元団地 J・K-9 区 理工学部総合研究棟建設予定地）において、建設予定地の北東部に広がっている住居群の範囲がより明らかになると思われる。

註

1) 郡元団地 I・J-4 区に文系総合研究棟があるため、本調査区付近に建設予定の理工系総合研究棟を便宜的に総合研究棟 II と呼称した。

4 平成13年度(2001年4月～2002年3月)の立会調査

2001-A 情報ネットワーク設備工事に伴う立会調査

調査地点 工学部機械工学科1号棟北西部(都元団地I-J-12-13区)

調査期間 2001年6月11日

工学部機械工学科1号棟の配管工事に伴う立会調査を行なった。1号棟の北西部に約70cm程度の深さの掘削が行なわれたので、その部分について調査を行なった(Fig.21)。土層の水平堆積状況から、水田層であると判断されたが、遺物の出土はなかった。



Fig. 21 都元団地 I-J-12-13 区(S=1/1000)

2001-B 総合研究棟新設その他電気設備工事に伴う立会調査

調査地点 総合研究棟周辺(都元団地J-K-3・4区)

調査期間 2001年8月6日～24日、9月3日



Fig. 23 都元団地 J-K-3-4 区(S=1/1000)

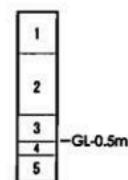


Fig. 22 I-J-12-13 区
土層柱状図

2層 水田層。灰褐色シルト質砂。鉄分が浸透し、白いバミス粒子を含む。

3層 水田層。暗灰褐色シルト質砂。鉄分が浸透し、白いバミス粒子を含む。

4層 (水田層。暗灰褐色シルト質砂。鉄分が浸透し、白いバミス粒子を含む。

5層 (水田層。灰白色シルト質砂。鉄分が浸透し、白いバミス粒子を含む。

層位は、5枚確認された
(Fig. 22)。
1層 表土・客土。

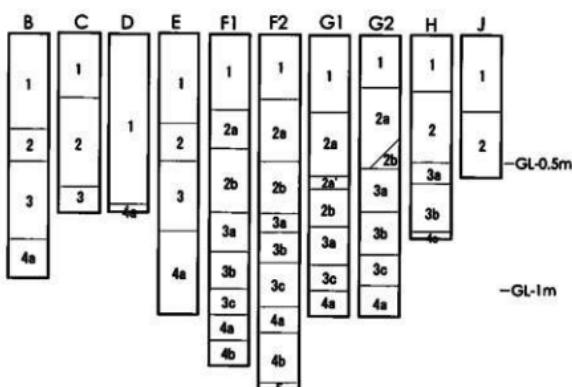


Fig. 24 J-K-3-4 区土層柱状図

総合研究棟建設後の周辺設備工事に伴う立会調査が行なわれた(Fig. 23-24)。各地点の2層以下は対応関係にあり、広く同層序を呈するものと考えられる。以下、各地点ごとに説明する。

A 地点は、総合研究棟の南西部と法文学部棟の間に設けられた配管工事地点であるが、法文学部橋本達也氏(現・総合研究博物館)によって、遺物包含層が掘削されていたとの連絡があった。調査室員が現場に駆けつけた際には既に埋め戻されていたため、層序などの確認は行なっていない。

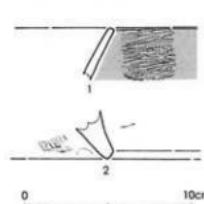
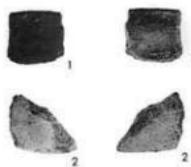


Fig. 25 B地点出土土器(S=1/3)



PL. 28 B地点出土土器

壺脚部(2)が出土している(Fig. 25, PL. 28, Tab. 9)。

C 地点

1層 表土・客土。
2層 近代以降の水田層。灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂。
3層 中近世の水田層。にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質砂。
4a層 古墳時代の包含層。黒褐色(10YR2/3)砂質シルト。上面には古墳時代以降の遺物集積遺構が確認される。すべて土器細片であり、図化できるものはない。

Tab. 9 2001-B B地点出土土器観察

No.	地点・層	種別	器種	部位	色	調	混和材	混和材の多さ	調整	備考
1	B-5a層	實質式	高杯かく	口縁部	外面: 橙5YR7/6, 内面・器内: にぶい黄褐色10YR7/2.	粗砂: 石英, 砂: 石英, 細砂: 黒色 粒: 石英.	3	外面: (-) 厚き, 内面: (-) ナデ.	外面上～内面下 端まで丹塗り.	
2	B-5a層	實質式	壺	脚部	外面上: 脊2.5YR6/8, 外面下: にぶい黄褐色10YR7/3.	粗砂: 石英, 砂: 石英, 細砂: 黒色粒: 石英.	4	外面: (-) ナデ, 内面: (-) 刷毛目 (-) ナデ.		

D 地点

1層 表土・客土。

4a層 古墳時代の包含層。黒褐色(10YR2/3)砂質シルト。上面には古墳時代以降の遺物集積遺構が確認される。すべて土器細片であり、図化できるものはない。

E 地点 (Fig. 26)

E地点では、配管工事に伴う、深さ約110cm前後の掘削が行なわれたため、立会調査を行なった。4a層上面からは、総合研究棟発掘の際に検出された遺物集積遺構の縁辺と見られる小破片が上面に貼り付いた状況が確認された。4b層上面においては、古墳時代の住居

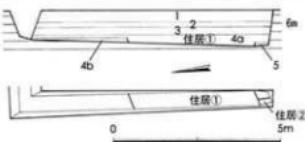


Fig. 26 E地点遺構(S=1/30)

跡が2軒切り合っている状況が確認された。そのため、写真撮影、平板実測、土層観察メモなどを行なって、調査を終了した。この地点は、住居跡群の周辺地区であることなどが確認されたので、今後の対応には慎重を要する地点である。出土遺物は多量に出土し、古墳時代後半の遺物と考えられる。遺物は4a層上面から4b層のどちらか、また、どの住居に伴うかの確認はできなかった。遺物は比較的多量に出土。古墳時代の壺(3~5.8~10)、大壺(7)、高杯・鉢・壺(6~11~15)などが出土している(Fig. 27, PL. 29~30, Tab. 10)。

1層 表土・客土。

2層 近代以降の水田層。灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂。

3層 中近世の水田層。にぶい黄褐色(10YR5/1)シルト質砂。

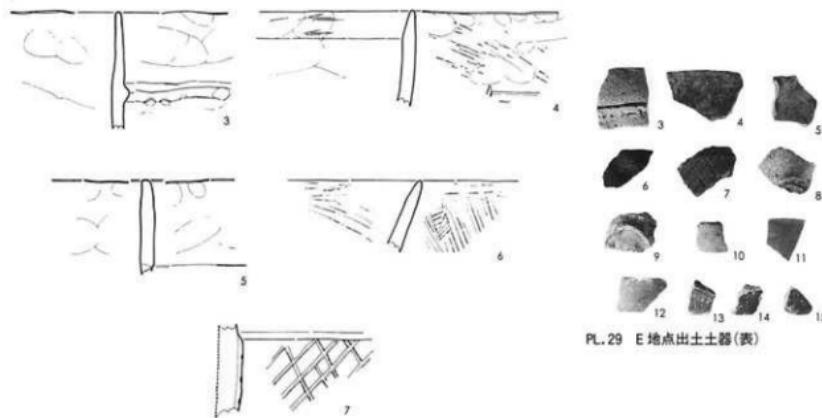
4a層 古墳時代遺物包含層。黒褐色(10YR2/3)砂質シルト。

4b層 古墳時代遺物包含層。黒褐色(10YR2/2)砂質シルト。

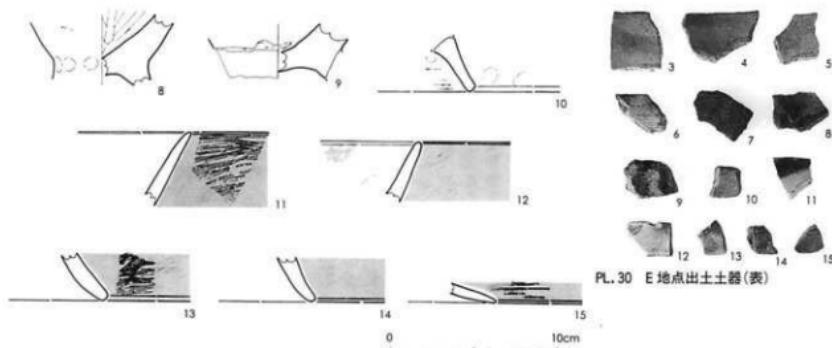
F1 地点

1層 表土・客土。

2a層 近代以降の水田層。灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂。小さなバミスを多く含む。



PL. 29 E地点出土土器(表)



PL. 30 E地点出土土器(表)

Fig. 27 E地点出土土器(S=1/3)

- 2b層 近代以降の水田層。灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂。小さなバミスを多く含む。
- 3a層 中近世水田層。灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂に黄褐色(10YR5/6)鉄分が混じる。バミス含む。
- 3b層 中近世水田層。にぶい黄褐色(10YR5/3に類似)シルト質砂。バミス混じり。
- 3c層 中近世水田層。黒褐色(10YR3/2)シルト質砂。バミス混じり。
- 4a層 古墳時代遺物包含層。黒褐色(10YR2/3)砂質シルト。ほとんど混ざり物なし。
- 4b層 古墳時代遺物包含層。黒褐色(10YR2/2)砂質シルト。ほとんど混ざり物なし。

F2 地点

1層 表土・客土。

- 2a層 近代以降の水田層。灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂。小さなバミスを多く含む。
- 2b層 近代以降の水田層。灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂。小さなバミスを多く含む。
- 3a層 中近世水田層。灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂に黄褐色(10YR5/6)鉄分が混じる。バミス含む。
- 3b層 中近世水田層。にぶい黄褐色(10YR5/3に類似)シルト質砂。バミス混じり。
- 3c層 中近世水田層。黒褐色(10YR3/2)シルト質砂。バミス混じり。
- 4a層 古墳時代遺物包含層。黒褐色(10YR2/3)砂質シルト。ほとんど混ざり物なし。
- 4b層 古墳時代遺物包含層。黒褐色(10YR2/2)砂質シルト。ほとんど混ざり物なし。

Tab.10 E 地点出土土器観察

No.	地点・層	種別	器種	部位	色調	混和材	混和材の多さ	調整	備考
3	E-4層	實質式	甕	口縁部	外面:に:白・黄褐色、内面:に:白	褐色・白色粒、粗砂・石英・角閃石・赤色粒、砂・石英・角閃石・細砂・角閃石・石英	5	内外面:(?)ナデ・指圧正直。	
				(突起部)	・10YR6/4、10YR6/4、10YR6/4、10YR6/4				
4	E-4層	實質式?	甕	口縁部	外面:に:白・黄褐色、内面:に:白	褐色・白色粒、粗砂・石英・角閃石・砂・角閃石・石英・角閃石、細砂・石英・角閃石	4	外面上部:(-)ナデ、外下面:(-)刷毛目→(?)ナデ・指圧正直、内面:(-)ナデ・指圧正直。	
				(突起部)	・10YR6/4、10YR6/4、10YR6/4、10YR6/4				
5	E-4層	實質式	甕	口縁部	外面:に:白・黄褐色、内面:黄	褐色・白色粒、粗砂・石英・砂・角閃石・石英	3	外面上部:(?)ナデ・指圧正直、内面:(?)ナ	口縁部と側部
				(突起部)	・10YR6/4、10YR6/4、10YR6/4、10YR6/4			デ・指圧正直。	の接合痕明瞭。
6	E-4層	實質式?	杯小甕	口縁部	外面:周面:10YR4/L、内面:に:白・黄	褐色・白色粒、砂・角閃石・石英、細砂・石英・角閃石	2	外面上部:(-)刷毛目→(?)ナデ、外	
				(突起部)	・10YR4/L、10YR4/L、10YR4/L			下面下部:(-)刷毛目→(?)ナデ・内面:(-)刷毛目→(?)ナデ。	
7	E-4層	實質式	甕	幅広突	外面:灰褐色、10YR4/L、内面:灰	褐色・白色粒、砂・石英・赤色粒	6	外面上部:(-)刷毛目→(?)ナデ。	
				帶部	7.5YR4/L				
8	E-4層	實質式	甕	脚部	外面:に:白・10YR6/3、内面:灰白	粗砂・石英・角閃石・赤色粒、砂・石英・角	6	外面上部:(-)ナデ、内面:(-)刷毛目→	
				2.5YR6/3、2.5YR6/3、2.5YR6/3	閃石・細砂・石英・角閃石			(?)ナデ・内底面:(?)ナデ。	
9	E-4層	實質式	甕	脚部	外面:に:白・黄褐色、10YR6/3、内面:に:白・黄	褐色・白色粒・赤色粒、粗砂・石英・角閃石・白	6	内外面:(?)ナデ・内底面:(-)ナデ、脚	脚接合部で脚
				10YR6/3、10YR6/3、10YR6/3	色粒、砂・角閃石・細砂・石英・角			台が外れる	
10	E-5層	實質式	甕	脚部	外面上:相:2.5YR6/8、外面下:に:白	褐色・白色粒・角閃石・粗砂・石英・角閃石	2	外外面:(-)ナデ、脚接合部で脚	
				10YR6/8、10YR6/8、10YR6/8	砂・角閃石・石英・角閃石			台が外れる	
11	E-4層	實質式	高环甕	口縁部	外面:10YR5/6、内面:に:白・黄褐色	褐色・白色粒・赤色粒、粗砂・石英・角閃石・白	2	外外面:(-)ヘラ磨き、内面:(?)ナデ、外	
				10YR5/6、10YR5/6、10YR5/6	色粒、砂・角閃石・細砂・赤色粒・石英、砂			面丹塗り。	
12	E-4層	實質式	高环甕	口縁部	外面:10YR5/2、5YR6/4、内面:灰白	砂・石英・角閃石・細砂・石英・角閃石	2	外外面:(?)ヘラ磨き、内面:(-)ナデ、	丹塗りが口縫
				10YR5/2、5YR6/4、10YR5/2、5YR6/4	砂・角閃石・石英・角閃石			縫内面に及ぶ。	
13	E-4層	實質式	高环	脚部	内面:に:白・10YR6/3、内面:に:白・黄褐色	褐色・白色粒・石英、細砂・赤色粒・石英、砂	2	外外面:(-)ヘラ磨き、内面:(?)ナデ、外	
				10YR6/3、10YR6/3、10YR6/3	・赤色粒・石英、細砂・赤色粒・石英、砂			面丹塗り。	
14	E-4層	實質式	高环	脚部	内面:に:白・5YR6/2、5YR7/4、内面:灰	褐色・白色粒・石英、粗砂・石英、砂・石英、	2	外外面:(?)ヘラ磨き、内面:(-)ナデ、外	
				5YR6/2、5YR7/4、5YR6/2	細砂・石英			面丹塗り。	
15	E-4層	實質式	高环	脚部	内面:灰褐色、10YR6/3、内面:黄褐色	砂・石英・白色粒、細砂・石英・白色粒、	2	外外面:(-)ヘラ磨き、内面:(-)ナデ、外	
				2.5YR6/1、10YR6/3、10YR6/3	色粒			面丹塗り。	

5層 無遺物層。にぶい黄褐色(10YR4/3)粗砂。

G1 地点

1層 表土・客土。

2a層 近代以降の水田層。

磁器出土。灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂。

小さなバミスを多く含む。

2a'層 近代以降の水田層。灰黄褐色(10YR4/2)層。

に類似)砂質シルト。

2b層 近代以降の水田層。

層。灰黄褐色(10YR5/2)。

2) シルト質砂。小さな

バミスを多く含む。

3a層 中近世水田層。(表) PL.31 G1 地点出土土器

灰黄褐色(10YR5/2)シ

ルト質砂に黄褐色(10YR5/6)鉄分が混じる。バミス含む。

3c層 中近世水田層。黒褐色(10YR3/2)シルト質砂。バ

ミス混じり。

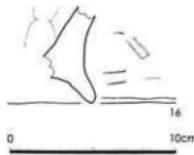


Fig. 28 G1 地点出土土器 (S=1/3)



Fig. 29 G1 地点出土土器 (裏)

4a層 古墳時代遺物包含層。黒褐色(10YR3/2)砂質シルト。上面より数点の土器が出土している。古墳時代以降の遺物集積遺構の縁辺部であると考えられる。(16)は、古墳時代の甕脚部である(Fig. 28, PL. 31, Tab. 11)。

G2 地点

1層 表土・客土。

2a層 近代以降の水田層。灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂。小さなバミスを多く含む。

2b層 近代以降の水田層。灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂。小さなバミスを多く含む。

3a層 中近世水田層。灰黄褐色(10YR5/6)鉄分が混じる。バミス含む。

3b層 中近世水田層。にぶい黄褐色(10YR5/3)に類似)シルト質砂。バミス混じり。

3c層 中近世水田層。黒褐色(10YR3/2)シルト質砂。バミス混じり。

4a層 古墳時代遺物包含層。土器比較的多量に出土したが固化できるものはなかった。黒褐色(10YR2/3)砂質シルト。

H 地点

1層 表土・客土。

Tab.11 2001-B G1 地点出土土器観察

No.	地点・層	種別	器種	部位	色調	混和材	混和材の多さ	調整	備考
16	G-4層	實質式	甕	脚部	外面:に:白・黄褐色、内面:に:	褐色・白色粒、粗砂・白色粒・石英・砂・白色	4 内外面:(?)刷毛目→(?)ナデ、		
				(突起部)	・10YR6/4、10YR6/4、10YR6/4	・石英・石英・細砂・白色粒・石英・黑色粒。			

Tab. 12 2001-B H 地点出土土器観察表

No.	地点・層	種別	器種	部位	色調	混和材	温和材の多さ	調査	備考
17	H-4層	灰質式	壺	口縁部 外面: (1-5)7.5YR5/4, 内面: 橙 7.5YR7/6, 器肉: 黄灰2.5YR6/1,	粗砂: 石英, 砂: 石英, 細砂: 黒色粒, 石英,	2 外面:(一)刷毛目→(二)ナデ, 内面:(二)ナデ,			
18	H-4層	灰質式	壺	口縁部 外面: 黄灰2.5YR6/1, 内面: (1-5)7.5YR7/3, 器肉: 増灰5/3,	粗砂: 石英, 砂: 石英, 細砂: 黒色粒, 石英,	2 内外面:(一)刷毛目→(一)丁寧	口縁部は墨み なナデ,		
19	H-4層	灰質式	高环	环部 外面: 橙7.5YR7/6, 内面: 器肉: 橙 5YR6/6,	細砂: 石英,	1 外面: 外面: 上部(一)ナデ, 口縁部 ~瓶底(一)刷毛目, 内面:(一)刷 毛目→(一)丁寧なナデ,	~瓶底(一)刷毛目, 内面:(一)刷 毛目→(一)丁寧なナデ,		

2層 近代以降の水田層。灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂。

3層 中近世水田層。灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂に黄褐色(10YR5/6)鉄分が混じる。バミス含む。

3b層 中近世水田層。にぶい黄褐色(10YR5/3)に類似)シルト質砂。バミス混じり。

4a層 古墳時代遺物包含層。黒褐色(10YR3/2)砂質シルト。上面より比較的多くの土器が出土している。古墳時代以降の遺物集積遺構の縁辺部であると考えられる。壺(17, 18), 高環(19)が出土している(Fig. 29, PL. 32, Tab. 12)。

J 地点

1層 表土・客土。

2層 近代以降の水田層。褐色(10YR5/1)砂質シルト。I-J 地点では、掘削穴が浅く、遺物包含層に影響はなかったため、メモと写真撮影を行なって調査を終了した。

2001-C 医学部 RI 施設配管工事に伴う立会調査

調査地点 医学部 RI 施設内(桜ヶ丘団地 H-8 区)

調査期間 2001 年 8 月 20 日

医学部 RI 施設内において、配管工事のための立会調査を行なった。旧地形が北から南へと傾斜していることが確認されているので、東側の RI 施設に向かう道路

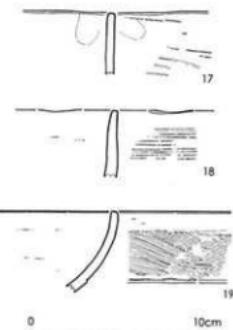
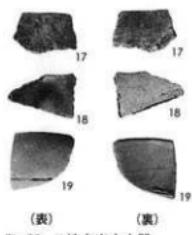


Fig. 29 H 地点出土土器 (S=1/3)



PL. 32 H 地点出土土器



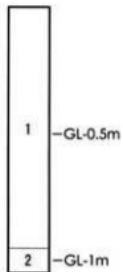
Fig. 30 桜ヶ丘団地 H-8 区 (S=1/1000)

部分から南北方向に、深さ 1 m 程度のトレンチを重機で掘削した(Fig. 30)。その結果、表土・搅乱層とその下に桜島薩摩テフラを確認でき、その上部に存在する包含層は全て削平されたものと判断した。遺物などは出土していない。本施設内の遺物包含層の残存状況は極めて悪い。

層位は、2 枚確認された(Fig. 31)。

1層 表土・客土。

2層 桜島薩摩テフラ。褐色(10YR8/6)バミス層。

Fig. 31
H-8 区土層柱状図

2001-D 医学部保健学科新館その他工事に伴う立会調査

調査地点 医学部医療技術短期大学部前・グランド南京東隔離植生(桜ヶ丘団地 I-9-K-8 区)

調査期間 2001 年 8 月 22-23 日

医学部保健学科前の花壇部分にある污水管切廻し工事と桜 2 本の移植とが並行して行なわれ、それに伴う調査を実施した(Fig. 32-33)。

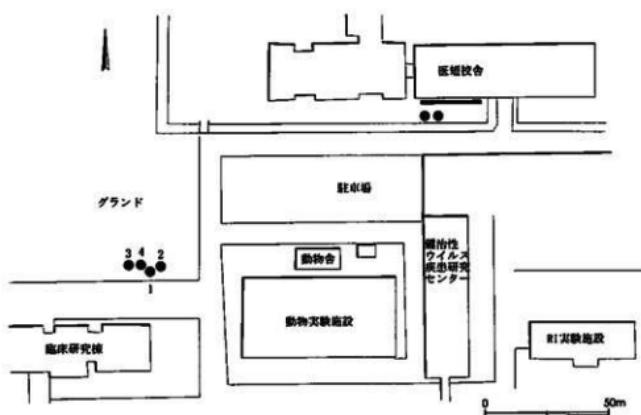


Fig. 32 横ヶ丘団地 I-9, K-8 区 (S=1/2000)

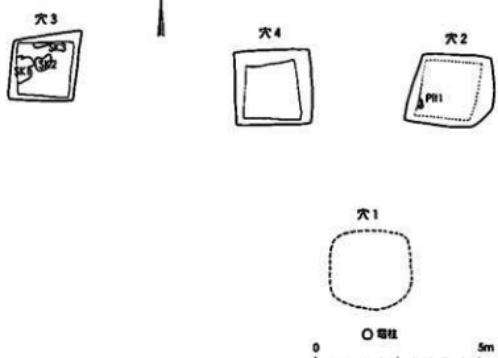
Fig. 33
K-8 区土壠柱状図

Fig. 34 K-8 区掘削穴位置 (S=1/30)

前者は、120～150cm の深さに重機によって掘削されたが、表土・客土のみで、遺物包含層を確認することは出来なかった。後者は桜を移動するために 75cm の深さに掘削したが、表土・客土のみであった。

移植先であるグランド南東隅では、重機によって約 1m 前後の移植穴を設けたが、壁面・穴底面に造構が確認できた時点で掘削を中止し、清掃、写真記録・平面測量などを行なって、調査を終了した(移植穴 1～4: Fig. 34)。旧地形は、グラウンド東側より西方向に傾斜しているようであり、包含層も旧地形に沿って形成されるため、包含状況は非常に良好である。今後、本地區で工事等が行なわれる場合、注意すべきであり、迅

速な対応を必要とする。

穴 1

南壁の観察では、旧地形が西に向かって急激に傾斜していることと、層位横断部分が確認された。調査は、写真撮影し、メモをとって終了した。

1 層 表土・客土。

2 層 弥生時代の遺物包含層。黒色

(10YR2/1) シルト。締まっている。1cm 大のバミスが混じる。数点の土器が出土地している。壺の刻目突起部(20), 平底の底部(22), 古墳時代前期の東原式壺(23)などが出土した(Fig. 35, PL. 33-34, Tab. 13)。

3 層 喜界アカホヤテフラ。褐色(10YR4/6) シルト。潤っている。0.5～1cm 大のバミスが混じる。

4 層 純文早期の遺物包含層。黒褐色(10YR2/3) 砂質シルト。1～3cm 大のバミスが混じる。

5 層 桜島薩摩テフラと 4 層との漸移層。暗褐色(10YR3/4) シルト。大小バミス多量。

穴 2～4 は、約 1m の移植穴を設けた時点で、写真撮影をし、平板測量で造構の平面測量(Fig. 34)・土壠観察を行い、調査を終了した。

穴 2

土壠確認終了前に埋め戻されたため、正確な観察が行なえなかった。

1 層 表土・客土。

2 層 弥生時代の遺物包含層。黒色(10YR2/1) シルト。

Tab.13 2001-D 穴1-3出土土器観察

No.	地点・層	種別	器種	部位	色	調	混和材	混和材の多さ	調整	備考
20	穴1・2層 弥生時代 前段5cm 中期手	縦	顎部	外面:褐色SYR6/6. 内面:明赤褐色SYR5/6. 裏部:黒褐色SYR5/2.	粗砂:石英・赤色粘土:石英・黑色粘土. 細砂:石英・黑色粘土.	2	外表面:(一)ナデ.			
21	穴3・2a層 弥生時代 前段5cm 中期手	縦	底部	外面:褐色SYR6/6. 内面:褐SYR6/6. 器内: に赤褐色SYR5/3.	粗砂:石英. 粗砂:石英. 细砂: 石英.	2	外表面:(一)刷毛目→(二)ナデ. 内面:(一)擦き.			
22	穴1・2層 弥生時代 後?	縦	底部	外面:褐色SYR6/6. 内面:灰黄 褐色SYR5/2.	粗砂:石英・赤色粘土:赤色粘土. 粗砂: 黑色粘土.	2	外表面:(一)ナデ.			
23	穴1・2層 東原式	甕	底部	外面:黒褐色2. SY3/1. 内面:黒褐色 2. SY3/2. 器内:黒褐色2. SY3/3.	粗砂:石英・赤色粘土:白色粘土. 粗砂: 白色粘土・石英.	5	外表面:(一)刷毛目→(一)スス付着. ナデ.			

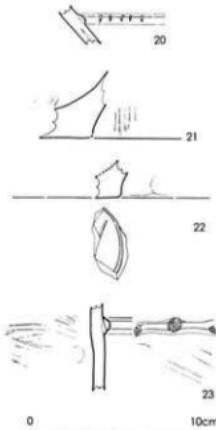


Fig. 35 穴1-3出土土器 (S=1/30)

締まっている。1cm
大のバミスが混じ
る。

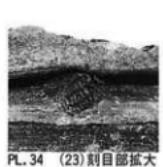
3層 喜界アカホヤ
テフラ。褐色
(10YR4/6) シルト。
この上面でビット
が確認された。

穴3
1層 表土・客土。

2a層 弥生時代の遺
物包含層。黒色
(10YR2/1) シルト。
締まっている。

2b層 弥生時代の遺
物包含層。黒褐色
(10YR2/2) シルト。
やや締まりがない。
バミス混じり。

PL. 33 穴1-3出土遺物



PL. 33 穴1-3出土遺物

2c層 弥生時代の遺物包含層。黒褐色(10YR2/2) シルト。やや締まりがない。バミス混じり。数点の弥生土器が出土しているが、図化できるのは1点のみ(21)である(Fig. 35, PL. 33, Tab. 13)。

2d層 弥生時代の遺物包含層。黒褐色(10YR2/2) シルトベースに褐色(10YR4/6) シルトが混じる。

3層 喜界アカホヤテフラ。褐色(10YR4/6) シルト。この上面で不定形土壤が確認された。

穴4

住居跡が2基
確認されている
(Fig. 36)。

- 1層 表土・客土。
- 2層 弥生時代の遺物包含層。黒褐色(10YR2/3) シルト。
バミス混じり。1点の土器が出土しているが図化でき
ないほどの小破片である。
- 3a層 喜界アカホヤテフラ。褐色(10YR4/6) シルトベー
スに、黒褐色(10YR2/3)が混じる。
- 3b層 喜界アカホヤテフラ。褐色(10YR4/6) シルト。バ
ミス混じり。
- 4層 繩文時代早期の遺物包含層。黒褐色(10YR2/3) 砂
質シルト。バミスが多く混じる。
- 住居①埋土 黒褐色(10YR2/2) シルト。バミスや土器小
破片が混じる。
- 住居②埋土 黒褐色(10YR2/2)類似。やや明るい) シル
ト。バミスや土器小破片が混じ
る。

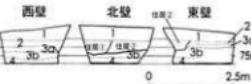
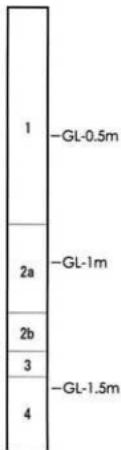


Fig. 36 穴4壁面 (S=1/30)

2001-E 農学部保存樹林内掘削
(学祭時のゴミ穴) に伴う立会調査
調査地点 農学部保存樹林地域内
(郡元団地 H-6 区)

調査期間 2001年11月9日

11月8日夕方、大学総合研究博物館の橋本達也氏により、農学部保存樹林内に掘削穴があるとの連絡を受けた。施設部企画課を通して問い合わせた結果、農学部の学生が、大学祭準備の折り、大量に廃棄されるゴミを処理する場所として掘削したとのことであった。本調査室では、その顧問、学生に構内の埋蔵文化財の包装状況を説明した上で、今後は大学構内の掘削を行なう場合、埋蔵文化財調査室

Fig. 37
H-6区土層柱状図

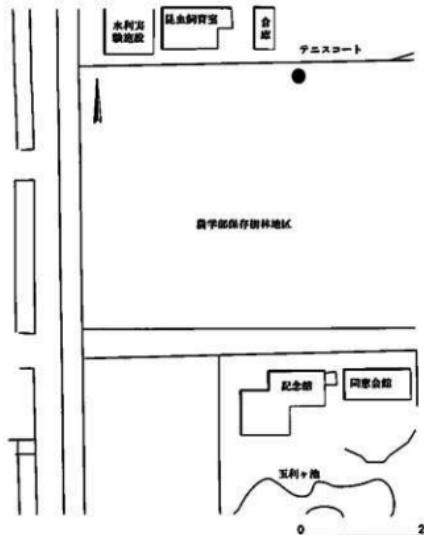


Fig. 38 郡元団地 H-6 区 (S=1/1000)

に届出することを通知した。同地点は幸い水田層のみであり、遺物分布域には重なっていなかった。整面清掃を行い、平板測量・壁面観察メモなどを行い、調査を終了した(Fig. 38)。

層位は、4 枚確認された(Fig. 37)。

1 層 表土・腐植土。

2a 層 水田層。灰褐色(7.5YR5/2)砂。締まっている。
0.5 ~ 5cm 大のバミス混じり。

2b 層 水田層。灰褐色(7.5YR4/2)砂。締まっている。
1cm 大のバミス混じり。

3 層 洪水層? にぶい黄褐色(10YR5/3)ベースに、0.5
~ 5cm 大のバミス混じり。褐色(7.5YR4/6)の鉄分混

じり。粗・細砂。

4 層 水田層。褐灰色(10YR4/1)シルト。締りがよい。鉄分の浸透あり。

2001-F 課外活動施設新設機械設備工事に伴う立会調査

調査地点 教育部サークル棟(郡元団地 M-4-5 区)

調査期間 2001 年 11 月 28 日・12 月 22-23 日・2002 年 1 月 10 日・2 月 22 日

サークル棟東側の機械設備工事に伴う調査を行なった(Fig. 39-40)。4ヶ所を 135cm まで重機によって掘り下げたが、搅乱層であった。マンホールに連結する配管工事の際には、比較的良好な状態で包含層が認められたが、遺物は出土しなかった(A 地点)。B 地点は、サークル棟のアーチを建てるための掘削穴が 2箇所に掘られた。若干の遺物が出土している。各地点とともに写真撮影・メモを行い、調査を終了した。

A 地点

層位は 3 枚確認された。

1 層 表土・客土。

2 層 弥生時代～古墳時代の遺物包含層。黒褐色(10YR2/2)シルト。

3 層 無遺物層。にぶい黄色(2.5Y6/3)砂層。

B 地点

層は 5 枚確認された。北

壁より 4 層から掘り込まれたビットを 2 箇所確認(ビット埋土: 黒褐色(10YR2/2)シルト)。

1 層 表土・客土。

2 層 斧黄褐色(10YR4/2)シルト。0.5cm 大の白色自然石を含む。

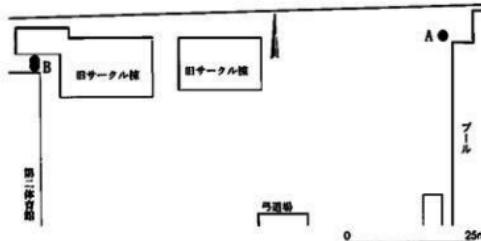


Fig. 39 郡元団地 M-4-5 区 (S=1/1000)

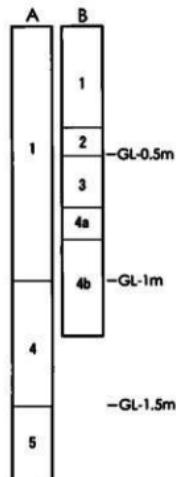


Fig. 40 M-4-5 区 土層柱状図

- 3層 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト。1.5cm 大のバミス、1cm 大の白色石を含む。
- 4a層 古墳時代の遺物包含層。黒褐色(10YR2/2)砂質シルト。
- 4b層 弥生時代の遺物包含層。黒褐色(10YR2/1)砂質シルト。

2001-G 教育学部幹線並木整備工事に伴う立会調査
調査地点 教育学部道路沿いと食堂裏(郡元団地 M-N-0-6-7-8 区)

調査期間 2002 年 1 月 10 日・2 月 5 ~ 17 日

1 月よりウラジロガシ・クロガネモチ・スダジイ・ソテツなどの樹木並木整備であったが、本調査室に連絡無く、設備課によって行なわれていた。本調査室では急遽、設備課の担当者との話し合いによって、その手続きの必要性を通達し、2 月から立会調査が行なわれた(Fig.41・42)。

A 地点



Fig.41 郡元団地 M-N-0-6-7-8 区(S=1/2000)

- 1層 表土・客土。
- 2層 黄褐色(10YR5/6)シルト質砂。
- 3層 暗灰色(10YR4/1)砂質ルート。
- 4層 黒褐色(7.5YR3/1)シルト。

B 地点

- 1層 表土・客土。
- 2層 弥生時代～古代の遺物包含層に対応。今回は遺物が出せず。黒褐色(10YR2/2)シルト。2cm 大の自然石含む。
- 3層 暗褐色(10YR3/3)シルト。

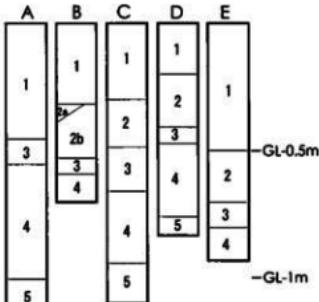


Fig.42 M-N-0-6-7-8 区土層柱状図

4層 灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト。白色の自然石を含む。

5層 明褐色(7.5YR5/6)シルト。白色の自然石を含む。
6層 黒褐色(10YR2/3)シルト。6cm 大のバミスを含む。

C 地点

西壁に 4 層から掘り込まれたビットを確認(ビット埋土: 黒色(10YR2/1)シルト)。

- 1層 表土・客土。
- 2層 灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト。
- 3層 明褐色(7.5YR5/6)シルト。
- 4層 黒褐色(10YR2/3)シルト。
- 5層 暗褐色(7.5YR4/4)砂質シルト。

D 地点

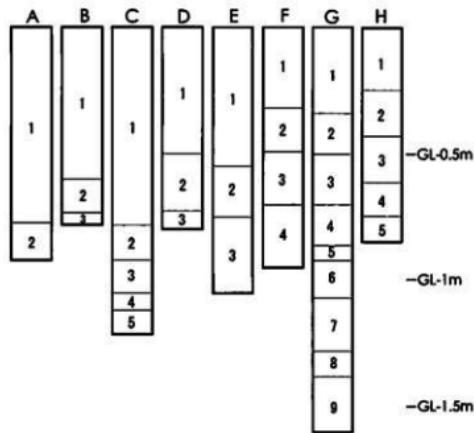
- 1層 表土・客土。
- 2層 暗灰色(10YR4/1)シルト。0.5cm 以下のバミスを含む。
- 3a層 明褐色(7.5YR5/6)シルト。
- 3b層 黒色(5YR1.7/1)シルト。1 ~ 5cm 大のバミス含む。
- 4層 暗褐色(7.5YR4/4)砂。1 ~ 5cm 大のバミス含む。

E 地点

- 1層 表土・客土。
- 2層 灰黄褐色(10YR4/2)シルト。
- 3a層 暗褐色(7.5YR3/4)シルト。
- 3b層 黑色(5YR1.7/1)シルト。1 ~ 5cm 大のバミス含む。

2001-H 理学部支障樹木移植等工事に伴う立会調査
調査地点 理学部 1 号館中庭・サークル棟南側～農学部・工学部・理学部・教育学部(郡元団地 D-E-4, K-10, P-5, J-K-9 区)

調査期間 2002 年 3 月 22・23・25・26・29 日



記録を取り調査を終了した。

A 地点 (Fig. 43-44)

1層 表土・客土。

2層 黒褐色(10YR3/2)砂質シルト。

B 地点

(Fig. 43-44)

1層 表土・客土。

2層 黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト。0.5
~ 1cm 大のパミスを含む。

3層 オリーブ黒色(5Y3/1)に類似したシ
ルト質粗砂層。パミスを多量に含む。

C 地点 (Fig. 43-45)

1層 表土・客土。

2層 黒褐色(10YR3/2)シルト質砂。

3層 黒褐色(10YR3/1)シルト質砂。

4層 暗黒色(10YR4/1)シルト質砂。

5層 暗紫灰(5P4/1)シルト質砂。

Fig. 43 D-E-4, K-10, P-5, J-K-9 区土層柱状図

理学部改修工事(調査コード 2001-2)と総合研究棟 II 建設(調査コード 2002-1)のため、支障樹木移植に伴う立会調査が行なわれた。移植元である理学部中庭は搅乱されており、記録は行なわなかった。移植先は、農学部・工学部・理学部・教育学部である。サークル棟南側の移植元は、複数の包含層が良好に残存しており、

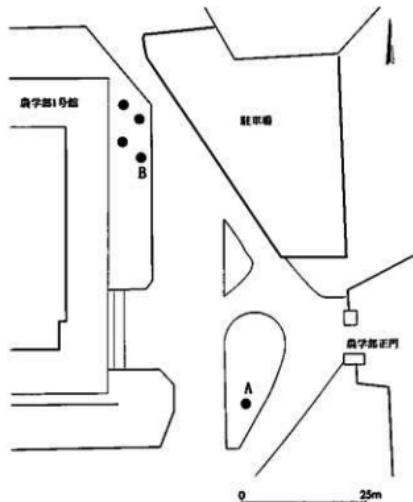


Fig. 44 郡元団地 D-E-4 区 (S=1/1000)

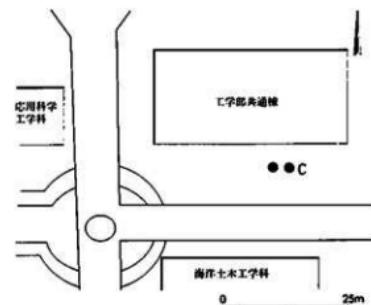


Fig. 45 郡元団地 K-10 区 (S=1/1000)

D 地点 (Fig. 43-46)

1層 表土・客土。

2層 黒褐色(10YR3/1)シルト質砂。パミスを含む。

3層 黒褐色(10YR2/3)砂質シルト。鉄分が浸透する。

E 地点 (Fig. 43-47)

1層 表土・客土。



Fig. 46 郡元団地 P-5 区 (S=1/1000)

- 2層 黒褐色(10YR3/2)シルト質砂。鉄分を含む。
3層 黒褐色(2.5Y3/2)シルト質砂。マンガンを含む。

F 地点(Fig.43-47)

- 1層 表土・客土
2層 黒褐色(7.5YR3/2)シルト質砂。
3層 黒褐色(10YR3/2)シルト質砂。
4層 黒褐色(7.5YR3/2)シルト質砂。

G 地点(Fig.43-47)

- 1層 表土・客土
2層 褐灰色(7.5YR4/1)砂質シルト。0.5~1cm 大のバミスを含む。鉄分の浸透有り。
3層 暗褐色(10YR3/3)シルト質砂。0.5cm 大のバミスを含む。上部に鉄分、下部にマンガンが浸透する。
4層 黒褐色(7.5YR3/2)シルト。1cm 大のバミスを含む。マンガン浸透。
5層 褐灰色(7.5YR4/1)砂質シルト。1cm 大のバミスを含む。マンガン浸透。
6層 黑褐色(7.5YR4/2)砂質シルト。3cm 大のバミスを含む。マンガン浸透。
7層 褐灰色(7.5YR4/2)シルト質砂。
8層 黑褐色(7.5YR3/1)シルト。粘性あり。
9層 褐黃褐色(10YR4/2)シルト。粘性あり。

H 地点(Fig.43-47)

- 1層 表土・客土。
2層 黑褐色(10YR3/2)シルト質砂。
3層 黑褐色(7.5YR3/2)シルト質砂。0.5cm 大のバミスを含む。鉄分が浸透する。

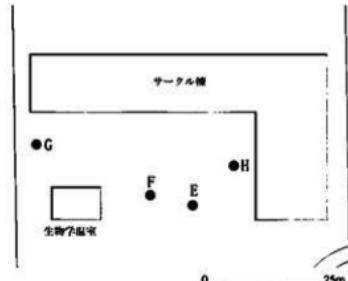


Fig.47 地元団地 J-K-9 区 (S=1/1000)

- 4層 灰褐色(7.5YR4/2)シルト質砂。0.5cm 大のバミスを含む。マンガン浸透。

- 5層 黄灰色(2.5Y4/1)シルト質砂。0.5cm 大のバミスを含む。マンガン浸透。

2001-I 医学部校舎新築その他機械設備工事に伴う立会調査

調査地点 医学部新保健学科棟西側(桜ヶ丘団地 I-8 区)

調査期間 2002 年 3 月 25 日

医学部校舎新築その他機械設備工事に伴う立会調査を行なった(Fig.48-49)。縄文時代早期前葉の遺物包含層(2層)や後期旧石器時代~縄文時代草創期にかけての遺物包含層(3層)が確認されたが、遺構・遺物ともに確認されていない。

1層 表土・客土。

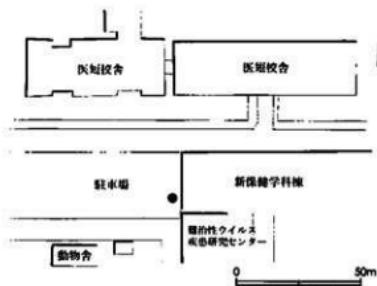


Fig.48 桜ヶ丘団地 I-8 区 (S=1/2000)

- 2層 縄文時代早期前葉の遺物包含層。黒褐色(10YR2/3)シルト質砂。小礫や 1.2~5mm 大のバミス含む。

- 3層 桜島薩摩チフラ。

- 4層 後期旧石器時代~縄文時代草創期の遺物包含層。いわゆる「チヨコ層」。黒褐色(10YR1/3)シルト。水分を多く含み、粘性が強い。

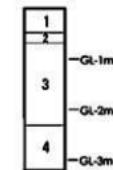


Fig.49 I-8 区土層柱状図

埋蔵文化財調査室要項

鹿児島大学埋蔵文化財調査室要項

○鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則

昭和 60 年 4 月 18 日

制定

(設置)

第 1 条 鹿児島大学(以下「本学」という。)に、鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会(以下「委員会」という。)を置く。

(審議)

第 2 条 委員会は、本学の施設計画を円滑に行うため埋蔵文化財に関する次の事項を審議する。

- (1) 基本計画の策定に関すること。
- (2) 調査結果に基づく対策に関すること。

(組織)

第 3 条 委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 学長が指名する副学長
- (2) 各学部長、附属図書館長、医学部附属病院長及び歯学部附属病院長

(3) 事務局長

(委員長)

第 4 条 委員会に委員長を置き、前条第 1 号の委員をもって充てる。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

(議事)

第 5 条 委員会は、委員の 3 分の 2 以上の出席をもって成立し、議事は、出席委員の 3 分の 2 以上をもって決する。

(委員以外の者の出席)

第 6 条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聞くことができる。

(調査委員会)

第 7 条 委員会は、本学の埋蔵文化財の調査を行うため、埋蔵文化財調査委員会(以下「調査委員会」という。)を置く。

第 8 条 調査委員会は、次の事項を審議する。

- (1) 調査実施計画に関すること。
- (2) 第 13 条に規定する調査室の室長等の選任に関すること。
- (3) 第 13 条に規定する調査室の予算に関すること。
- (4) その他埋蔵文化財及び第 13 条に規定する調査室の業務に関すること。

第 9 条 調査委員会は、次に掲げる委員をもって組織し、

学長が任命する。

- (1) 各学部の教授、助教授又は講師の中から選出された者各 1 名

(2) 第 15 条第 2 項に規定する調査室長

2 前項第 1 号の委員の任期は、2 年とし、委員に欠員を生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

第 10 条 調査委員会に委員長を置き、前条第 1 項第 1 号の委員の中から互選により選出する。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

第 11 条 調査委員会は、委員の過半数の出席をもって成立し、議事は、出席委員の過半数をもって決する。

第 12 条 調査委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聞くことができる。

(調査室)

第 13 条 調査委員会に、本学の埋蔵文化財の調査に関する業務を行うための埋蔵文化財調査室(以下「調査室」という。)を置く。

第 14 条 調査室は、次の業務を行う。

- (1) 調査実施計画の立案
- (2) 発掘調査、分布調査及び確認調査
- (3) 調査報告書の作成
- (4) その他必要な事項

第 15 条 調査室に、室長、主任及びその他必要な職員を置く。

2 室長は、本学の考古学に関する教官の中から委員会が推薦し、学長が任命する。

3 室長は、調査委員会の定める方針に基づき調査室の業務を掌理する。

4 室長の任期は、2 年とする。ただし、再任を妨げない。

5 主任は、調査室の職員の中から、特に埋蔵文化財に関する専門知識を有する者を調査委員会が推薦し、学長が任命する。

6 主任は、室長の命を受けて調査室の業務を処理する。

7 職員は、調査室の業務に従事する。

(事務)

第 16 条 埋蔵文化財に関する事務は、施設部企画課において処理する。

附 則

1 この規則は、昭和 60 年 4 月 18 日から施行する。

2 この規則の施行後最初に任命される委員及び室長の任期は、第 9 条第 2 項及び第 15 条第 4 項の規定にかかる

わらず、昭和 62 年 3 月 31 日までとする。	荒井 啓（連合農学研究科長）
3 鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則(昭和 51 年 1 月 22 日制定)は、廃止する。	山口建太郎（事務局長）
附 則	中山右尚（附属図書館長）
この規則は、平成 9 年 4 月 1 日から施行する。	・鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会委員（平成 13 年 4 月 1 日現在）
附 則	委員長 辻尾界三（工学部教授）
この規則は、平成 13 年 4 月 1 日から施行する。	委員 本田道輝（法文学部助教授） 日隈正守（教育学部助教授） 竹内 亨（医学部教授） 小椋 正（歯学部教授） 古川一男（理学部教授） 松元光春（農学部助教授） 中村啓彦（水産学部講師） 新田栄治（調査室長併任 法文学部教授） 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 室長（併） 法文学部教授 新田栄治 主任（併） 法文学部助手 中村直子 （併） 法文学部助手 新里貴之 技術補佐員 寒川朋枝 技術補佐員 王 力明
・鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会（平成 13 年 4 月 1 日現在）	
委員長 石田忠彦（鹿児島大学副学長）	
委員 辰村 康（法文学部長） 坂尾 隆（教育学部長） 井上政義（理学部長） 永田行博（医学部長） 納 光弘（医学部付属病院長） 大工原恭（歯学部長） 伊藤学而（歯学部附属病院長） 矢野利明（工学部長） 西中川駿（農学部長） 上田耕平（水産学部長）	

受贈図書一覧

書名	発行所	書名	発行所
単行本			
上庄庵寺彩色壁面の謎を追う	淀川町教育委員会	平成9.10年度神戸市道跡現地説明会資料集	神戸市教育委員会
因談中国古代鋼鏡史	海鳥社	倉敷埋蔵文化財センター年報7	倉敷埋蔵文化財センター
太宰府市史 痕跡資料編	太宰府市	松山市埋蔵文化財調査年報12	松山市教育委員会・財團法人松山市生涯学習センター
潤文時代庶民社会論	松永幸男著作集刊行会		文化財センター
研究紀要			愛媛大学埋蔵文化財調査室
かながわの考古学 研究紀要6	財団法人かながわ考古学財団	平成19.20年度	愛媛大学埋蔵文化財調査室
紀要第11号	大田区立郷土博物館	和集1995.1996年度	鳥取県教育庁埋蔵文化財調査センター
富山考古学研究第4号	財団法人富山県文化振興財団	下関市立考古博物館年報6	下関市立考古博物館
金沢大学考古学紀要第25号	慶應大学文学部考古学講座	福岡県埋蔵文化財発掘調査年報-平成10年度	福岡県教育委員会
研究紀要第10号	三重県埋蔵文化財センター	福岡県埋蔵文化財発掘調査年報-平成11年度	福岡県教育委員会
名古屋市博物館研究紀要第24巻	名古屋市博物館	春日市埋蔵文化財年報6-8	春日市教育委員会
静岡市立笠置博物館研究紀要2	静岡市立笠置博物館	熊本大学埋蔵文化財調査室2000年度?	熊本大学埋蔵文化財調査室
研究紀要第7.8号	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所	浜谷村立歴史民俗資料館年報第26号	浜谷村歴史民俗資料館
古事 天理大学考古学研究紀要第5巻	天理大学考古学研究室		
考古学論功第23回	奈良県立橿原考古学研究所		
大阪市文化財協会研究紀要第4号	財団法人大阪市文化財協会		
兵庫県埋蔵文化財研究紀要 刃物考	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査監修所		
研究紀要第7号	兵庫県立歴史民俗資料館		
研究紀要第5号	下関市立考古博物館		
ミュージアム知覚紀要第7号	ミュージアム知覚		
年報		過去刊行物	
調査年報13	財団法人北海道埋蔵文化財センター	若小牧の埋蔵文化財No.14	若小牧市埋蔵文化財調査センター
平泉文化研究年報第1号	若手県教育委員会	若小牧市埋蔵文化財調査センター所報3	若小牧市埋蔵文化財調査センター
東北大学埋蔵文化財調査年報14-16	東北大学埋蔵文化財調査研究センター	テエタ 北海道埋蔵文化財センター一だより第5.6号	財団法人北海道埋蔵文化財センター
東北文化財センター年報6.7	財団法人東北文化財センター	沖縄研究ノート10	宮城学院女子大学キリスト教文化研究所
年報No.18	財団法人君津郡市文化財センター	研究ノート10号	財団法人茨城県教育財團
財団法人千葉市文化財調査協会年報11-13	財団法人千葉市文化財調査協会	歴史人第29号	筑波大学歴史・人類学系
年報20	財団法人茨城県教育財团	きみさらづ第17.18号	財団法人君津郡市文化財センター
年報8	財団法人かながわ考古学財団	人歴史泉報2000	東京立大学人類史調査グループ
年報17	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所	青山考古第18号	青山考古学会
静岡市立笠置博物館年報11	静岡市立笠置博物館	資料目録12	東京都埋蔵文化財センター
平成12年度三重県埋蔵文化財年報	三重県埋蔵文化財センター	埋文とやまと vol. 74	富山県埋蔵文化財センター
西原考古学研究所年報25	奈良県立橿原考古学研究所	かがみはらの埋文	香慈原市埋蔵文化財調査センター
高槻市文化財年報平成11年度	高槻市教育委員会	みえNo.30.31	三重県埋蔵文化財センター
枚方市文化財年報22	財団法人枚方市文化財研究調査会	リキア地ビザンティン遺跡調査 ニユーベラーゼーNo.1	リキア地ビザンティン遺跡調査
京都市考古資料館年報 平成9.10年度	京都市考古資料館	名古屋市博館No.139-144	名古屋市博物館
京都市考古資料館年報 平成11.12年度	京都市考古資料館	研究所年報89-96	財団法人奈良県埋蔵文化財調査研究所
城郭研究年報vol.1.10	姫路市立城郭研究室	ひらかた文化財だより第47.48.49号	財団法人枚方市文化財研究調査会
神戸市埋蔵文化財年報	神戸市教育委員会	アスカディア・古墳の森vol. 14. 15	大阪府立近つ飛鳥博物館
平成11年度年報	兵庫県教育委員会	森大91-96号	財団法人大阪市文化財協会
平成5-8年度神戸市道跡現地説明会資料集	神戸市教育委員会	大阪府立近つ飛鳥博物館	大阪府立近つ飛鳥博物館
		リーフレット京都No.131-158	財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館
		京都府埋蔵文化財情報第79-82号	財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
		清陵第105.106号	奈良県立橿原考古学研究所
		ひょうごの遺跡39-42号	兵庫県教育委員会
		いぶきNo.29.30	広島県教育委員会

書名	発行所	書名	発行所
歴史第29号	広島県立歴史民俗資料館	杉久保豊谷道跡	財團法人かながわ考古学財団
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第25、26号	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	神明久保道跡	財團法人かながわ考古学財団
自然科学研究所研究報告第26号	岡山県立大学	上行寺甚造跡	財團法人かながわ考古学財団
所報言徳第30、31号	岡山県古代吉備文化財センター	福荷木道跡	財團法人かながわ考古学財団
石見銀山道跡ニュースNo.2	鳥取県・大田市・温泉津町・仁	一升持道跡所在やぐら群	財團法人かながわ考古学財団
古代文化研究第9号	鹿町教育委員会	一心院跡所やぐら群	財團法人かながわ考古学財団
ドキ土器まいぶんNo.14-16	鳥取県吉備文化センター	玉原寺・通やぐら道跡	財團法人かながわ考古学財団
佐加太第14、15号	鳥取県吉備文化財調査センター	覚業寺やぐら群道跡	財團法人かながわ考古学財団
あやらぎNo.5	滋賀県坂井市社会教育研究会文	覚園寺門跡東やぐら群	財團法人かながわ考古学財団
歴史散步No.13、14	下関市立博物館	釜利谷道6丁目西地区やぐら群	財團法人かながわ考古学財団
ひとよし歴史研究第4号	久留米市教育委員会	下相原・下町並道跡	財團法人かながわ考古学財団
南日本文化第34号	人吉市教育委員会	古間道跡群IX	財團法人かながわ考古学財団
西南諸島研究記念論文集	鹿児島短期大学付属南日本文化	吉岡道跡群VI	財團法人かながわ考古学財団
鹿児島文化第72、73号	鹿児島短期大学付属南日本文化	吉岡道跡群VII	財團法人かながわ考古学財団
南九州貝塚文系土器!	研究会	向原道跡III	財團法人かながわ考古学財団
調査報告書	南九州縄文研究会	光触寺跡やぐら・大江橋跡所在	財團法人かながわ考古学財団
米原3号跡	鶴川町教育委員会	やぐら	財團法人かながわ考古学財団
大糸毛1 造林調査報告書!	鶴路町埋蔵文化財調査センター	三ヶ岡道跡I	財團法人かながわ考古学財団
郡山道跡	仙台市教育委員会	三ヶ岡道跡II	財團法人かながわ考古学財団
下飯田道跡	仙台市教育委員会	山王堂復谷やぐら群	財團法人かながわ考古学財団
沼田道跡第173次調査	仙台市教育委員会	飯綱上道跡	財團法人かながわ考古学財団
水沢道跡群範囲確認調査	水沢市教育委員会	和田山やぐら群道跡II	財團法人かながわ考古学財団
和沢跡	水沢市教育委員会	名越道跡内やぐら群	財團法人かながわ考古学財団
岩手県埋蔵文化財発掘調査報	財团法人岩手県文化振興事務局	池子道跡群X木器集成団跡	財團法人かながわ考古学財団
越時代品類別ノイシに関する基礎的研究	埋蔵文化センター	長良西道跡	財團法人かながわ考古学財団
上野岸跡道跡	いわき短期大学	田中・代道跡	財團法人かながわ考古学財団
谷畑道跡	財团法人茨城県教育財团	長野原埋蔵文化財発掘調査要覧その10.11	財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
神田道跡3	財团法人茨城県教育財团	椿原道跡II	財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
金田西・西坪B道跡	財团法人茨城県教育財团	椿原道跡II	財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
宮後道跡I	財团法人茨城県教育財团	高瀬ヶ谷道跡・山ノ口古墳群	財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
横間道跡	財团法人茨城県教育財团	富士川SA関連遺跡	財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
福の沢久保道跡	財团法人茨城県教育財团	傾家辺跡II・梅橋古墳	財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
下大井道跡	財团法人茨城県教育財团	矢崎道跡	財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
猿田道跡	財团法人茨城県教育財团	御領所道跡	財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
船野道跡	財团法人茨城県教育財团	山林道跡	財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
板戸道跡	財团法人茨城県教育財团	広久手18.20.30号窓跡	財團法人静岡県埋蔵文化財センター
十萬原道跡I	財团法人茨城県教育財团	名古屋大学加藤質量分析計測試験報告書(XII)	名古屋大学年代测定総合センター
十萬原道跡2	財团法人茨城県教育財团	針田道跡・東坪之内道跡・田中道跡	財團法人岐阜県文化財保護センター
西平愛栄ノ木道跡	財团法人茨城県教育財团	寺尾敷道跡・穂谷口道跡	財團法人岐阜県文化財保護センター
石畠道跡	財团法人茨城県教育財团	佐口道跡	財團法人岐阜県文化財保護センター
邊板木穴墓	財团法人茨城県教育財团	宮田前道跡	財團法人岐阜県文化財保護センター
大山1道跡2	財团法人茨城県教育財团	中山道	財團法人岐阜県文化財保護センター
足崎道跡	財团法人茨城県教育財团		
中原道跡3	財团法人茨城県教育財团		
長野江向山道跡	財团法人茨城県教育財团		
津賀道跡	財团法人香取郡市文化財センター		
烏名前野道跡	財团法人香取郡市文化財センター		
烏名前野東道跡・烏名境松道跡・谷田郷道跡	財团法人香取郡市文化財センター		
殿間道跡	財团法人香取郡市文化財センター		
加止里第6号	財团法人香取郡市文化財センター		
伊地山道跡II	財团法人香取郡市文化財センター		
五十塚道跡	財团法人香取郡市文化財センター		

書名	発行所	書名	発行所	
八幡塙跡発掘調査報告書		岐阜県土岐市教育委員会	岐阜県造形文化財発掘調査報告書	神戸市教育委員会
與吉古墳群		福井県美浜町教育委員会	白水道跡第3、6、7次 高津浦大塚遺跡第1、2次	神戸市教育委員会
埋蔵文化財調査摘要-平成12年度-		財团法人富山市文化振興財團	南宿尾	神戸市教育委員会
鍵刀被鉢発掘調査概要報告書		富山市文化財調査室	二葉町造形文化財発掘調査報告書	神戸市教育委員会
旧居留地使局同舍連跡発掘調査報告書		米原町教育委員会	ゆの山の山脚にて馬鹿泉・湯山遺跡発掘調査の記録	神戸市教育委員会
川口家住宅(旧居留地使局同舍連)	修理工事報告書	米原町教育委員会	五疊田中庭跡発掘調査報告書	神戸市教育委員会
高麗城跡・米原駅西遺跡		米原町教育委員会	御座跡	神戸市教育委員会
北朝源通跡・押賀古墳群発掘調査報告書		三重県埋蔵文化財センター	住吉宮町遺跡(第19、20次)	神戸市教育委員会
中島城跡発掘調査報告書		三重県埋蔵文化財センター	住吉宮町遺跡(第24、32次)	神戸市教育委員会
コド・B遺跡(第2、3次)発掘調査報告書		三重県埋蔵文化財センター	若松町遺跡	神戸市教育委員会
金剛寺跡跡(第5次)辰ノロ古墳群		三重県埋蔵文化財センター	上武遺跡発掘調査報告書	神戸市教育委員会
御器所跡内造形文化調査報告!!		三重県埋蔵文化財センター	松谷遺跡発掘調査報告書	神戸市教育委員会
蛇丸宮発掘調査報告		三重県埋蔵文化財センター	TSUBORI	近畿都市教育委員会
南北辺境堺開拓調査報告		三重県埋蔵文化財センター	特別史跡姫路城跡!	近畿都市教育委員会
高ノ舞跡発掘調査報告		三重県埋蔵文化財センター	二郎宮ノ遺跡	兵庫県教育委員会
辰巳前田遺跡発掘調査報告		三重県埋蔵文化財センター	奥新田古墳群	兵庫県教育委員会
上野山遺跡		三重県埋蔵文化財センター	白沢3号窓	兵庫県教育委員会
神戸市斎跡(第2次)・桂田遺跡(第3次)	星羅町発掘調査報告	三重県埋蔵文化財センター	外野野跡	兵庫県教育委員会
前田町遺跡(第1次)発掘調査報告		三重県埋蔵文化財センター	舟船社遺跡	兵庫県教育委員会
天香寺北瀬古遺跡発掘調査報告		三重県埋蔵文化財センター	龜山遺跡	兵庫県教育委員会
船坂II		三重県埋蔵文化財センター	久留美・猪俣遺跡群	兵庫県教育委員会
船坂町跡		三重県埋蔵文化財センター	向山古墳群・市条寺古墳群・一乗寺經冢・矢削遺跡	兵庫県教育委員会
理賃文化財発掘調査報告!!		三重県埋蔵文化財センター	志方遺跡群!	兵庫県教育委員会
理賃文化財発掘調査報告!!		三重県埋蔵文化財センター	志方遺跡群II	兵庫県教育委員会
理賃文化財発掘調査報告!!!		三重県埋蔵文化財センター	大釜山遺跡	兵庫県教育委員会
理賃文化財発掘調査報告!!!		三重県埋蔵文化財センター	大龜谷山古墳	兵庫県教育委員会
有達遺跡		三重県埋蔵文化財センター	高松町遺跡	兵庫県教育委員会
力男新斯提发掘調査報告		三重県埋蔵文化財センター	福島古墳群	兵庫県教育委員会
舡橋		三重県埋蔵文化財センター	北摂ニュータウン内造形文化調査報告	兵庫県教育委員会
大和木器資料!		奈良県立橿原考古学研究所	香ヶ丘下垂山遺跡	兵庫県教育委員会
南葛城郡群IV		奈良県立橿原考古学研究所	長坂遺跡	兵庫県教育委員会
南葛城郡群V		奈良県立橿原考古学研究所	本之内城跡	兵庫県教育委員会
奈良県遺跡調査報告(第1、2回)		奈良県立橿原考古学研究所	岡山大学構内造形文化調査研究年報18	岡山大学
待持山遺跡!!!		大阪大学埋蔵文化財調査委員会	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	岡山大学
勝利寺の負荷量調査報告書		大阪大学大学院文学研究科考古学研究室	センター	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
古墳時代前・中期における埋蔵人骨と埋葬様式		大阪大学大学院文学研究科	岡山大学古代吉備文化財センター	岡山大学
大阪府埋蔵文化財発掘調査報告		財团法人大阪市文化財協会	岡山県古代吉備文化財センター	岡山大学
瓜破、瓜破北道跡発掘調査報告		財团法人大阪市文化財協会	岡山県古代吉備文化財センター	岡山大学
瓜破、瓜破北道跡発掘調査報告XVI		財团法人大阪市文化財協会	岡山県古代吉備文化財センター	岡山大学
長原、瓜破遺跡発掘調査報告XVII		財团法人大阪市文化財協会	岡山県古代吉備文化財センター	岡山大学
足原山跡東部地区発掘調査報告IV		財团法人大阪市文化財協会	岡山県古代吉備文化財センター	岡山大学
奈良県遺跡調査報告!!		財团法人大阪市文化財協会	岡山県古代吉備文化財センター	岡山大学
大畠遺跡調査報告		財团法人大阪市文化財協会	岡山県古代吉備文化財センター	岡山大学
1992年度発掘調査報告書!		財团法人大阪市文化財協会	天瀬遺跡・岡山城外縁跡	岡山大学
1992年度発掘調査報告書2		財团法人大阪市文化財協会	津屋遺跡3	岡山大学
1994年度発掘調査報告書!		財团法人大阪市文化財協会	清水谷遺跡	岡山大学
1995年度発掘調査報告書!		財团法人大阪市文化財協会	広島大学統合移転地埋蔵文化財調査年報XIV	広島大学
平成年度国家助成により発掘調査報告書		財团法人大阪市文化財協会	帝釈快跡跡・奈良県調査室年報 XIV	奈良県
史跡・瓜破古墳		高槻市教育委員会	森木坂遺跡	高槻市教育委員会
平成12年度(附)八尾市文化財調査研究会事業報告書		財团法人八尾市文化財調査研究会	淀川町内遺跡群VII	淀川町教育委員会
			百舌鳥郡群IV	淀川町教育委員会
			柏原の奥遺跡・豊安寺遺跡・湯ノ辯跡・土佐井遺跡	柏原町教育委員会
			堂池遺跡	柏原町教育委員会
			茂秀寺遺跡	柏原町教育委員会
			志布志目墓跡・志布志目墓跡・大堤II遺跡・大堤I遺跡・萬谷野遺跡・杉谷遺跡・森山遺跡	志布志町教育委員会

書名	発行所	書名	発行所
布志名大谷III 遺跡	島根県教育委員会	大荒遺跡・天田遺跡	春日市教育委員会
布志名大谷I遺跡(1号墳)	島根県教育委員会	大坪遺跡	春日市教育委員会
古志本郷遺跡II	島根県教育委員会	須佐石遺跡	春日市教育委員会
恵良遺跡・堂ノ塚聖跡・上条遺跡 ・木戸神社跡・立女遺跡	島根県教育委員会	太宰府史跡出土軒瓦・印打底文字 瓦型式一覧	九州歴史資料館
熊谷遺跡・若宮遺跡	島根県教育委員会	太宰府史跡発掘調査報告書I	九州歴史資料館
丸山遺跡・大丸山跡	島根県教育委員会	玄界灘における海底遺跡の探査と 確認調査	九州大学大学院考古学研究室
岩屋遺跡・平井川遺跡	島根県教育委員会	福岡県筑紫元村遺跡	九州大学大学院人文科学研究院
櫛谷遺跡・上沢III遺跡・古志本郷 遺跡III	島根県教育委員会	菅牟田荒谷遺跡	唐津市教育委員会
塙津丘陵遺跡群・小久白塙群	島根県教育委員会	外原遺跡	唐津市教育委員会
長瀬丘陵墓群・吳照遺跡(vol.1)	島根県教育委員会	唐津市内遺跡調査調査	唐津市教育委員会
石見境間遺跡調査報告書2	島根県教育委員会	衣干古墳群	唐津市教育委員会
上野遺跡・竹ノ崎遺跡	島根県教育委員会	東山I遺跡	唐津市教育委員会
御崎谷遺跡・大床遺跡	島根県教育委員会	千々賀遺跡	唐津市教育委員会
荒畠遺跡・ラント遺跡・野田遺跡	島根県教育委員会	半田新田遺跡	唐津市教育委員会
山代二子塚古墳	島根県教育委員会	金丸遺跡II	久留米市教育委員会
山代二子塚古墳整備事業報告書	島根県教育委員会	筑後国府跡	久留米市教育委員会
西川遺跡VIII	島根県教育委員会	横道遺跡II	久留米市教育委員会
石見銀山	島根県教育委員会	大谷古墳群	久留米市教育委員会
石見銀山遺跡発掘調査報告書(1)	島根県教育委員会	路原遺跡	久留米市教育委員会
石見境間遺跡調査報告書1	島根県教育委員会	旗原遺跡	久留米市教育委員会
戸井谷尻遺跡・吳老塙遺跡	島根県教育委員会	久留米市中国地方整備局・島 根県教育委員会	久留米市教育委員会
松江市手間古墳発掘調査報告書	島根県教育委員会	久留米市中国地方整備局・島 根県教育委員会	久留米市教育委員会
山吉塙出土遺跡について	島根県教育委員会	山ノ上遺跡・赤坂古墳群	福岡県教育委員会
田和山遺跡	島根県教育委員会	上原原・南造跡III	福岡県教育委員会
小野地区の遺跡	島根県教育委員会	西町新道跡II	福岡県教育委員会
東雲神社遺跡	松江市教育委員会	仁右衛門焼造跡II	福岡県教育委員会
東野中村遺跡	松江市教育委員会・財団法人松 山市生涯学習進行財團埋蔵文化 財センター	理藏文化財調査報告	福岡県教育委員会
斎院の遺跡II	松江市教育委員会・財団法人松 山市生涯学習進行財團埋蔵文化 財センター	本郷源川遺跡	福岡県教育委員会
松ノ元遺跡	財団法人愛媛県埋蔵文化財セン ター	川原西遺跡(第3点)	福岡県教育委員会
鶴が峰古墳	財団法人愛媛県埋蔵文化財セン ター	曾根田原山遺跡II	福岡県教育委員会
水戸森遺跡・七反山遺跡・今岡城 跡	財団法人愛媛県埋蔵文化財調査 センター	船越高原遺跡II	福岡県教育委員会
犬除遺跡2次調査	財団法人愛媛県埋蔵文化財調査 センター	越路六郎遺跡・越路貴船遺跡	福岡県教育委員会
尼ヶ吉城跡・かわらがはな遺跡	財団法人愛媛県埋蔵文化財セン ター	長野古墳群	福岡県教育委員会
播磨寒天神山古墳	財団法人松山市生涯学習課財 團埋蔵文化財センター	墨東原遺跡	福岡県教育委員会
福音寺地区的遺跡III	財団法人松山市生涯学習課財 團埋蔵文化財センター	内ヶ穂遺跡II	福岡県教育委員会
大瀬遺跡	財団法人松山市生涯学習課財 團埋蔵文化財センター	JR筑肥線開拓用地内遺跡群	前原市教育委員会
鳴尾・原ノ塚遺跡	財団法人愛媛県埋蔵文化財セン ター	有田原・木本遺跡	前原市教育委員会
大野城市の文化財第33集	財団法人松山市生涯学習課財 團埋蔵文化財センター	前原西町遺跡	前原市教育委員会
佐賀県大友遺跡	大野城市教育委員会	三郎丸原ノ上	宗像市教育委員会
松木遺跡IV	九州大学大学院人文科学研究院	久原繩ヶ下	宗像市教育委員会
安施原田近跡群	那賀川町教育委員会	東郡登り立	宗像市教育委員会
内田遺跡群	那賀川町教育委員会	むなかみの文化財	宗像市教育委員会
野口遺跡群	那賀川町教育委員会	宮地遺跡群	宗像市教育委員会
牛野地区遺跡群III	新宮町教育委員会	大柄沼田組泊池ノ下地区・孤島遺 跡・人通地区・長者屋遺跡	中津市教育委員会
七夕古墳	志免町教育委員会	長者屋遺跡	中津市教育委員会
上平田遺跡	春日市教育委員会	上川岸遺跡	佐賀市教育委員会
野藤遺跡	春日市教育委員会	佐賀市埋蔵文化財認定調査報告書	佐賀市教育委員会
大土塚水城跡	春日市教育委員会	石上井遺跡II	佐賀市教育委員会
		野中遺跡	佐賀市教育委員会
		増田遺跡IV	佐賀市教育委員会
		徳水遺跡10区	佐賀市教育委員会
		徳水遺跡12区	佐賀市教育委員会
		上揚遺跡区	佐賀市教育委員会
		長ノ原遺跡	鳥栖市教育委員会
		勝利城下下遺跡	鳥栖市教育委員会
		安永田遺跡	鳥栖市教育委員会
		今泉遺跡	鳥栖市教育委員会
		永田古墳群	鳥栖市教育委員会
		加賀田遺跡	鳥栖市教育委員会
		京町遺跡	鳥栖市教育委員会
		西田遺跡	鳥栖市教育委員会
		水傍(飯坂)遺跡	美津ノ町文化財保護協会
		夏六古墳	勝本町教育委員会

書名	発行所	書名	発行所
國府塗跡	豊本町教育委員会	瀬戸原造跡	鹿屋市教育委員会
久立古塚群発掘調査報告(Ⅰ)	朝陽町教育委員会	小野原造跡(Ⅲ)	鹿屋市教育委員会
大岩田上村遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター	小野原造跡(Ⅳ)	鹿屋市教育委員会
合間第2造跡	宮崎県埋蔵文化財センター	椿ノ原造跡	加世田市教育委員会
虎爪・植木田遺跡、黒戸戸・上示野 原造跡	宮崎県埋蔵文化財センター	西大原造跡・ヘゴノ原造跡・流会 造跡・小原ノ原造跡・安若8造 跡・中路造跡・別府城跡・志風 原造跡	加世田市教育委員会
元地図遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター	馬舟跡遺跡・堂ノ原寺造跡	加治田市教育委員会
種穂原第1造跡・下星野造跡	宮崎県埋蔵文化財センター	伊原造跡	加治木町教育委員会
種穂原第2造跡・杉木原造跡・永ノ 原造跡	宮崎県埋蔵文化財センター	木ヶノ頭造跡	高山町教育委員会
油内穴室群先史遺跡調査整理報告書 町原造跡	宮崎県埋蔵文化財センター	笠立造跡	田代町教育委員会
志戸原造跡・頭原造跡	宮崎県埋蔵文化財センター	宮下造跡・小房造跡前造跡	知覧町教育委員会
上ノ原造跡	宮崎県埋蔵文化財センター	谷脇造跡・出口造跡	垂水市教育委員会
本城原造跡	宮崎県埋蔵文化財センター	大中原造跡	恵占町教育委員会
松元跡・井手口造跡・翠原造跡	宮崎県埋蔵文化財センター	僧守鉢跡	隼人町教育委員会
右谷ノ原造跡	宮崎県埋蔵文化財センター	牧牛岩山の宜野湾ノロ墓	隼南町教育委員会
王ノ原造跡	宮崎県埋蔵文化財センター	藤原の城跡園中王陵陪添ようどれ 首里城跡	浦添市教育委員会
井手口造跡・雀田造跡・片ノ田造跡 木崎跡	宮崎県埋蔵文化財センター		仲間町立埋蔵文化財センター
本城古墳27号・60号横穴墓	宮崎県埋蔵文化財センター		
宮田造跡・柳津造跡・中別府造 跡	宮崎県埋蔵文化財センター		
東九州自動車道(都農~西都原)周 保施設文化財発掘調査報告書!	宮崎県埋蔵文化財センター		
海北土原造跡・中尾造跡・裴原 造跡	宮崎県埋蔵文化財センター		
船越跡	宮崎県埋蔵文化財センター		
天神先造跡	えびの市教育委員会	よみがえる北の中・近世 織り出 されたアイヌ文化	財団法人アイヌ文化振興・研 究推進機構
小門地区遺跡群	えびの市教育委員会	財団法人アイヌ文化振興・研究推 進機構 僕藏品目録2	財団法人アイヌ文化振興・研 究推進機構
長江地区遺跡群	えびの市教育委員会	うよこそ!はにわのふるさとへ 旅の身振り	福岡県教育委員会
呂明寺造跡	えびの市教育委員会	飯がついた土器	千葉県立伝統工芸の丘
後平2号跡	えびの市教育委員会	団舞・長津田新舞群	大田区立郷土博物館
内ノ野造跡	えびの市教育委員会	三条界隈のやまと屋	財団法人かながわ考古学財団
東川内地区遺跡群	えびの市教育委員会	来原町の文化財	土岐市美術館歴史館
横木地下式横穴墓群	えびの市教育委員会	モノクロームの守り神	来原町教育委員会
横木地区遺跡群 馬被造跡・坂元A 造跡	都城市教育委員会	佐世	大阪府立近づく鳥居博物館
カム・ヤキ古窯跡群(II)	伊仙町教育委員会	川に生きる	大阪府立近づく飛鳥博物館
水道跡!	指宿市教育委員会	昔むかしのたべものは?	広島県立歴史民俗資料館
下尾ノ原造跡	大口市教育委員会	色彩の考古学	神戸市教育委員会
向井ノ原造跡	大網町教育委員会	古代のメインロード	神戸市教育委員会
正戸山造跡・大久保段造跡・屋敷 造跡・今宿段造跡・貝ノ原造跡 ほか	大網町教育委員会	神戸の古墳	神戸市教育委員会
東馬場造跡		奴国王の出現と北部九州のクニグ ニ	春日市奴国の丘歴史資料館
久保段IV造跡その1		古代の器	久米のきみはゑ五百年
小原山造跡		久米のきみはゑ五百年	春日市奴国の丘歴史資料館
小竹山造跡・岩本造跡			久米島自然文化センター
竹ノ山AB造跡			
上野原跡(第10地点)	大隅町教育委員会	パンフレット	
上野原跡(第10地点)	鹿児島県立埋蔵文化財センター	造跡を掲げめぐる	
東田造跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター	安息窟群発掘調査レポート	
浅川牧(II.)造跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター	北原新幹線埋蔵文化財包含地調査 報告(2)	
町原造跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター	蔚の原像をさぐる	
保坂原造跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター	研究所要覧	
北浦・伊佐地区埋蔵文化財分布調 査報告書(II)	鹿児島県立埋蔵文化財センター	丹波根山三駆謝山北麓の造跡	
北浦・伊佐地区埋蔵文化財分布調 査報告書(VIII)	鹿児島県立埋蔵文化財センター	津屋造跡を深る2	
船原跡・西ノ原B造跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター	百川町の造跡探検	
一ノ谷造跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター	霞が瀬れた9つの文化財	
仲田戸原跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター	古代歌謡マニュアルvol.2「紀文歌 」ドリゲル料理を作ろう!	
山内遺跡・大畠造跡・西根造跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター	山陰道まいぶんアーツ	
大能造跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター	石見銀山造跡ニースル	
大能造跡B地点	鹿児島市教育委員会	いにしえの川津を櫻る	
	鹿児島市教育委員会	愛媛県水辺植物園散策part.7	
		山川市文化財ガイドドップ	

付編 鹿児島大学構内遺跡群郡元団地における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

本編は、古環境研究所に依頼した自然科学分析結果報告書を掲載したものである。
報告中の試料地点の表記と、調査名および調査地点との対応は以下のとおりである。

本編	調査コード・調査地点	備考
総合研究棟Ⅱ	2001-3 郡元団地 K-9 区（総合研究棟Ⅱ試掘）	本書 3 章報告
理学部改修	2001-2 郡元団地 J-7・8 区（理学部改修）	未報告
サークル棟	2001-1 郡元団地 M・N-4・5 区（サークル棟）	本書 2 章報告
J・K-9 区 e4 区	2001-2 郡元団地 J-7・8 区（理学部改修）	未報告

付編 鹿児島大学構内遺跡群郡元団地における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	総合研究棟Ⅱ, 19層	炭化物	酸-7%H ₂ O-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No. 2	理学部改修, A7区炉層	炭化物	酸-7%H ₂ O-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析(AMS)法

2. 測定結果

試料名	¹⁴ C年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ¹⁴ C年代 (年BP)	層年代(西暦)	測定No. (Beta-)
No. 1	4280±40	-27.3	4240±40	交点: cal BC 2880 1 σ: cal BC 2900~2870 2 σ: cal BC 2910~2860, 2810~2750 2720~2700	169711
No. 2	1600±40	-27.4	1560±40	交点: cal AD 530 1 σ: cal AD 430~550 2 σ: cal AD 410~600	166713

1) ¹⁴C年代測定値

試料の¹⁴C/¹²C比から、単純に現在(1950年AD)から何年前かを計算した値。¹⁴Cの半減期は、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定¹⁴C/¹²C比を補正するための炭素安定同位体比(¹³C/¹²C)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3) 補正¹⁴C年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、¹⁴C/¹²Cの測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

4) 層年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中¹⁴C濃度の変動を校正することにより算出した年代(西暦)。校正には、年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と¹⁴C年代の比較により作成された校正曲線を使用した。最新のデータベースでは、約 19,000 年 BPまでの換算が可能となっている。

層年代の交点とは、補正¹⁴C年代値と層年代校正曲線との交点の層年代値を意味する。 1σ (68 %確率)と 2σ (95 %確率)は、補正¹⁴C年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した層年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

文献

- Stuiver, M., et. al., (1998). INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration. Radiocarbon, 40, p. 1041-1083.
中村後夫 (1999) 放射性炭素法. 古考古学のための年代測定学入門. 古今書院. p.1-36.

II. 植物珪酸体（プラント・オパール）分析

1.はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_4) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

2. 試料

分析試料は、総合研究棟II、サークル棟、J・K-9区e4区の3地点から採取された計8点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピース法（藤原, 1976）を用いて、次の手順を行った。

- 1) 試料を 105°C で 24 時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約 1 g に対し直徑約 $40 \mu\text{m}$ のガラスピースを約 0.02 g 添加（電子分析天秤により 0.1 mg の精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法 ($550^{\circ}\text{C} \cdot 6$ 時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 ($300\text{W} \cdot 42\text{kHz} \cdot 10$ 分間) による分散
- 5) 沈底法による $20 \mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピース個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1 gあたりのガラスピース個数に、計数された植物珪酸体とガラスピース個数の比率をかけて、試料 1 g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各種植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5} g ）をかけて、単位面積で厚さ 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は 2.94（種実重は 1.03）、ヒエ属（ヒエ）は 8.40、ヨシ属（ヨシ）は 6.31、ススキ属（ススキ）は 1.24、メダケ節は 1.16、ネザサ節は 0.48、クマザサ属（チスマザサ節・チマキザサ節）は 0.75、ミヤコザサ節は 0.30 である。タケ亞科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1～図3に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、ヒエ属型、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）、Aタイプ（くさび型）

〔イネ科-タケ亞科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

〔イネ科-その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、地下茎部起源、未分類等（樹木）

ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、その他

5. 考察

(1) 稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1 gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山, 2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) 総合研究棟II（図1）

12層（弥生時代中期）、13層（弥生時代中期）、18層、19層（縄文時代中期）について分析を行った。その結果、12層と13層からイネが検出された。このうち、13層では密度が5,400個/gと高い値であり、12層でも4,400個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

2) サークル棟（図2）

S D 1 の埋土3（弥生時代中期）と埋土4（弥生時代中期）について分析を行った。その結果、埋土4からイネが検出されたが、密度は700個/gと低い値である。このことから、当時は調査区周辺で稲作が行われており、そこから何らかの形でS D 1内にイネの植物珪酸体が混入したものと考えられる。

3) J・K-9区e4区（図3）

7層（弥生時代中期）と8層（弥生時代中期）について分析を行った。その結果、両試料からイネが検出された。このうち、8層では密度が9,000個/gと高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。7層では密度が2,400個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属型（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはヒエ属型が検出された。

ヒエ属型は、総合研究棟IIの13層（弥生時代中期）から検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌヒエなどの野生種が含まれるが、両者の差異は植物分類上でも不明確であり、現時点では植物珪酸体の形態からこれらを識別することは困難である（杉山ほか, 1988）。また、密度も700個/gと低い値であることから、ここでヒエが栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌヒエなどの野・雑草である可能性も否定できない。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種は由来するものが含まれている可能性が考えられる。また、キビ族型にはヒエ属やエノコログサ属に近似したものが含まれており、ウシクサ族B（大型）の中にはサトウキビ属に近似したものが含まれている。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畠作物は分析の対象外となっている。

(3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

弥生時代中期とされる土層では、上記以外にもヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、タケア科などが検出され、ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシア属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）などの照葉樹起源も検出された。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねイネが優勢となっていることが分かる。

以上のことから、弥生時代中期とされる土層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺にはススキ属やチガヤ属、竹節類などが生育する草原的なところも見られ、遺跡周辺にはシイ属、アカガシア属、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

6. まとめ

植物珪酸体（プラント・オパール）分析の結果、弥生時代中期とされる総合研究棟IIの12層と13層、およびJ・K-9区e4区の8層からは、イネが多量に検出され、稻作が行われていた可能性が高いと判断された。また、J・K-9区e4区の7層などでも、稻作が行われていた可能性が認められた。

弥生時代中期とされる土層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稻作が行われていたと推定される。また、周辺にはススキ属やチガヤ属、竹籠類などが生育する草原的なところも見られ、遺跡周辺にはシイ属、アカガシ属、クヌキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

文献

- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）、考古学と植物学、同成社、p.189-213。
 藤原宏志（1976）「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) - 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法」、考古学と自然科學、9、p.15-29。
 藤原宏志・杉山真二（1984）「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) - プラント・オパール分析による水田址の探査」、考古学と自然科學、17、p.73-85。

表1 鹿児島大学構内遺跡群都元田地における植物珪酸体分析結果

分類群	学名	地点・試料	総合研究棟II				サークル棟		J・K-9区e4区	
			12層	13層	16層	19層	SBI-3	SBI-4	7層	8層
イネ科	Gramineae (Grasses)									
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	44	54				7	24	90	
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type		7							
キビ族型	<i>Panicaceae</i> type		7							
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	19	7	81	15				24	41
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	19	142	7	15	128	49	24	98	
ウシクサ族A	<i>Andropogoneae</i> A type	38	61	7		7	56	36	46	
ウシクサ族B	<i>Andropogoneae</i> B type			7		7	7			
Aタイプ(くさび型)	A type		6							
タケモ科	Bambusoideae (Bamboo)									
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>						192	63		
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	6					21			
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	6								
未分類等	Others	19	7			36	49	5	7	
その他イネ科	Others									
表皮毛起源	Husk hair origin	19	47	7						
棒状珪酸体	Rod-shaped	216	319	203		64	90	212	297	
茎部起源	Stem origin		7	68			14	6		
地下茎部起源	Underground stem origin		7	20						
未分類等	Others	203	305	264		107	236	291	394	
根木起源	Arborescent									
ブナ科(イ属)	<i>Castanopsis</i>	13					6	7		
ブナ科(アカガシ属)	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	6					30	7		
クスノキ科	<i>Lauraceae</i>	44						18		
マンサク科(イスノキ属)	<i>Ditrylum</i>	51					21	73	21	
その他	Others	6	34			14	21	73	21	
植物珪酸体総数	Total	716	1011	655	29	577	611	825	1023	

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	1.30	1.60			0.20	0.71	2.64	
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type		0.57						
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	1.20	0.43	5.12	0.92				
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.24	1.77	0.08	0.18	1.59	0.60	1.53	2.62
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>					2.23	0.73	0.30	1.11
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.03				0.10			
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	0.02							

タケモ科の比率 (%)

メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>	62		96	100	
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>			4		
クマザサ節型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)					
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	38				

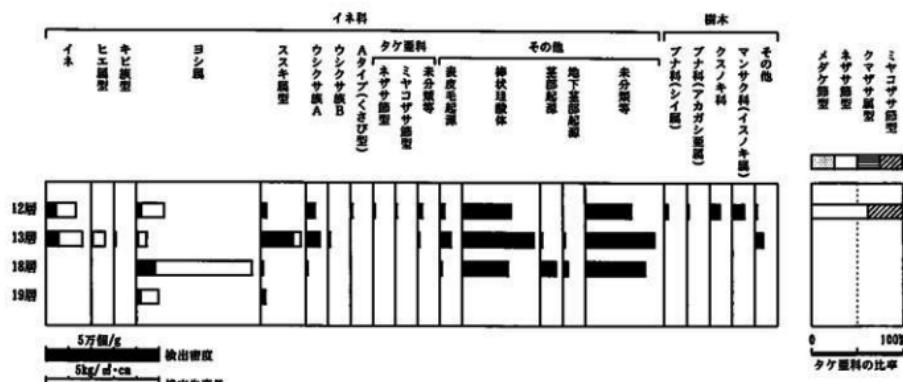


図1 鹿児島大学構内道跡群都元団地総合研究棟IIにおける植物種群分析結果

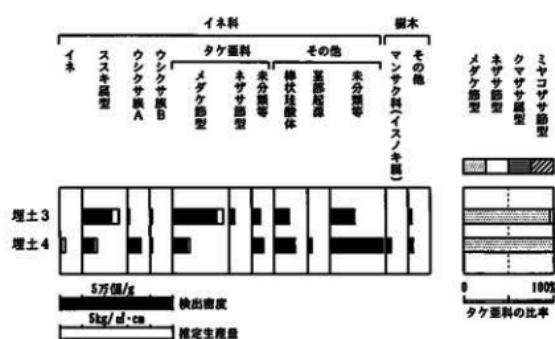


図2 鹿児島大学構内道跡群都元団地サークル棟SD1における植物種群分析結果

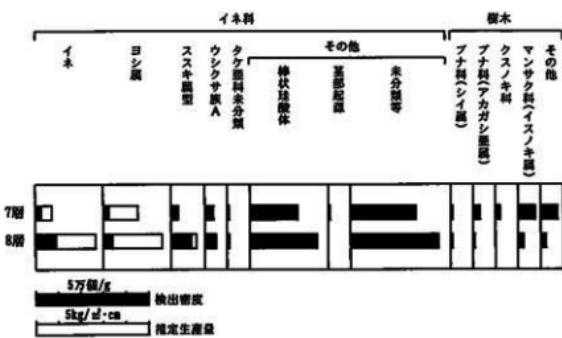
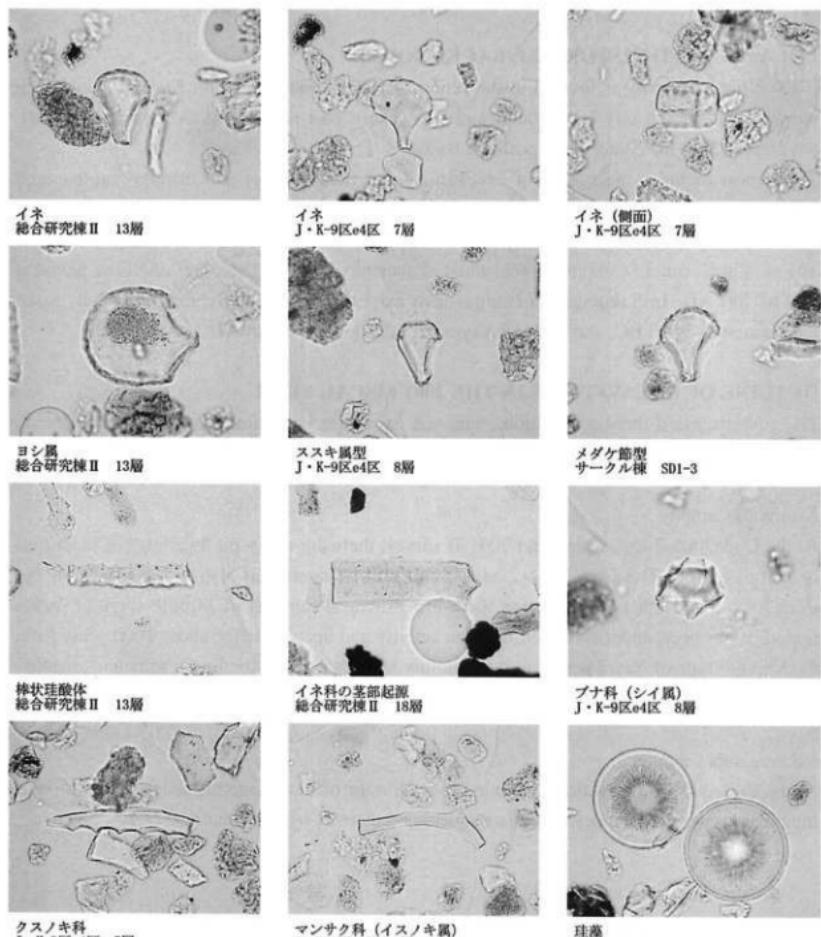


図3 鹿児島大学構内道跡群都元団地J・K-9区e4区における植物種群分析結果



植物硅酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真

— 50 μm —

SUMMARY

This is the report of the rescue excavations and surveys of the sites in the campuses of Kagoshima University in the 2001 fiscal year.

LOCATION AND HISTORICAL BACKGROUND

Kagoshima University is located in the center of Kagoshima city, south Kyushu Island. The western part of the city is highland and the eastern part is lowland. Active volcano Mt. Sakurajima is in the center of Kagoshima Bay.

This report includes the results of excavations and field surveys at Korimoto campus and Sakuragaoka campus. Korimoto campus is located in the lowland, Sakuragaoka campus is located in the highland.

The sites in Korimoto campus are registered as ancient villages in latter half of Kofun period at 500 to 700 AD. In Sakuragaoka campus also exist the sites in early Jomon period dated approximately 9500 BC, and those of Yayoi period from 300 BC to AD 250.

OUTLINE OF EXCAVATIONS IN THE 2001 FISCAL YEAR

The center carried three excavations, one test excavation and nine surveys. They were all rescue archaeological surveys in the 2001 fiscal year.

Korimoto Campus

At the Code2001-2 excavation and 2001-B survey, there are many pit dwellings of latter half of Kofun period. The Code2001-2 excavation will be continued also to next year. At the Code2001-1 and 2001-2 excavation there are structural remains of Middle stage of Yayoi period. It has been understood that the man activity had been done for about 1000 years from the Middle stage of Yayoi period to the antiquity from those investigation results on Korimoto campus.

Sakuragaoka Campus

At the Code2000-2 excavation, we found four pit traps of Late stage of Palaeolithic period or Incipient stage of Jomon period. It was understood there as with of hunting.

報告書抄録

ふりがな	かごしまだいがくまいぞうぶんかざいちょうさしつねんばうじゅうなな							
書名	鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報 17							
編著者名	中村直子・新里貴之・寒川朋枝							
編集機関	鹿児島大学埋蔵文化財調査室							
所在地	〒890-8580 鹿児島市郡元一丁目 21-24 Tel 099-285-7270 FAX 099-285-7271							
発行年月日	2003年3月							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査起因
		市	町 村					
鹿児島大学構内遺跡 郡元団地M・N・4・5区	鹿児島市郡元一丁目 20-6	4620		31 34 11	130 32 48	20010925 ～ 20011104	800 m ²	校舎建設
鹿児島大学構内遺跡 郡元団地K-9区	鹿児島市郡元一丁目 21-40	4620		31 34 11	130 32 48	20020313 ～ 20020326	4 m ²	校舎建設に伴う試掘
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
鹿児島大学構内遺跡 M・N・4・5区		古墳時代 弥生時代	溝状遺構 ピット群	陶磁器 笠貫式土器 弥生土器（入来式・山ノ口式・高付式・中津野式） 土錐 磨製石器 打製石器 擦石				
鹿児島大学構内遺跡 K-9区		弥生時代・古墳時代	土壙状遺構 小ピット群	陶磁器 古墳時代の土器				

鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報17

2003年3月発行

編集・発行 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

鹿児島市郡元一丁目21番24号

TEL 099-285-7270

印刷 斯文堂株式会社

鹿児島市新屋敷町14番16号

TEL 099-226-3747

Kagoshima University Research Center for Archaeology Report Vol.17

CONTENTS

Chapter

1 Report of archaeological research in fiscal year 2001	1
2 Report of excavation at Area M-N-4·5 in Korimoto Campus	6
3 Report of test excavation at Area K-9 in Korimoto Campus	19
4 Report of rescue surveys	23

Appendix

Report of radiocarbon dating and plant opal analysis of excavated samples from Korimoto Campus	41
---	----

Published by

**Kagoshima University Research Center for Archaeology
2003**